
やさしい物語をつむいで

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさしい物語をつむいで

【Nコード】

N16790

【作者名】

律花

【あらすじ】

父に連れられて公園へ遊びに来た優花は、そこでひとりの少年と出会う。

ふたりはときどき、会って話をするようになるが……

絵を描くのが好きな男の子と、物語を書くのが好きな女の子のお話

1・出会った日

初夏らしい、すこし強い日差しが降りそそぐ昼下がり。

優花は父と手をつないで、青々とした芝生を歩いていた。数メートル前を駆けていた兄が振り返って、この辺にしようかと父に声をかける。それから白球を地面に置き、持っていたミットを右手にはめた。

父もそれに応じて優花の手を離し、もう一方の手に持っていたミットをはめる。

「代わりばんこにするから、ちょっと待っててな」

今日は、お兄ちゃんが先に投げる番。

その言葉にこくんとうなずいて、優花は父の後ろに下がり、ふたりがキャッチボールするさまを眺めた。

白球がぱん、と小気味よい音をたてて、父の茶色いミットに飛び込んでくる。間髪を入れず、今度はゆるやかな曲線を描いて、兄のミットに吸い込まれてゆく。

優花はキャッチボールが好きではなかった。飛んでくるボールを受け取るのは怖いし、コントロールが悪いせいでしょっちゅう明後日の方向に逸れるボールを、父に拾いに行かせなければならぬのが嫌だからだ。

一定のリズムを持って、父と兄の間を行ったり来たりする白球。どうしてお兄ちゃんのボールは、あんなふうにまっすぐ飛ぶんだらう。

自分の手に納まっている、柔らかいピンクのゴムボールに視線を落とし、そんなことを考えた。

すぐにキャッチボールを見るのに飽いて、優花はあたりを見渡した。休日だけあって、公園内はたくさんの子どもたちや家族連れでにぎわっている。芝生をぐるりと囲むアスファルト道に目をやれば、

ジョギングをしているひとや、犬の散歩をしているひとが通り過ぎていった。

はたと、優花の視線が止まった。新緑の葉を茂らせた大きな木の陰。小学生の男の子たちでいっぱいになった、ジャングルジムの向こう側。自分と同じくらいの年の子どもが、木製ベンチにひとり座っている。

優花の目は、その子の手元に吸い寄せられた。

大きなノートのようなもの。なにかを書いているようだった。

ひとりなのかな。あんなところで、なにしてるのかな。

どうしてか、とても心が惹かれた。

振り返って、キャッチボールに夢中になっている父と兄を一瞥し、優花は足を踏み出した。

男の子？ それとも、女の子？

初めに抱いたのは、そんな疑問だった。

さらさらした短い髪。白い肌。小さな顔に、伏せられた大きな目。その中性的な容貌は、男の子であっても女の子であっても、違和感はないように思えた。

そして、近くに来て分かったこと。

ノートのようなものは、スケッチブックだった。ふたつに折ったそれに、その子は一心になにかを描いている。ときどき顔を上げるけれど、すこし離れた場所にいる優花に気づく気配はない。

優花はそつとベンチの後ろに回り込み、その子の手元を覗き込んだ。

「わあ」

思わず声を上げてしまった。

透明な青空と白い雲のコントラスト。まばゆい陽光を照り返すような芝生。赤いペンキで塗装されたジャングルジム。

淡い色彩と繊細な筆致が、ありふれた風景を別世界のように描き出していた。

わたしと同じくらいの子なのに、すごいなあ。

ため息をこぼしつつ顔を上げる。と、茶褐色の瞳と目が合った。心臓が跳ねた。見つかった。反射的に、数歩あとじさる。

「……え、と」

なんで声なんか出しちゃったんだろう。それよりも、なんでここに来ようと思ったんだろう。いつもは知らない子に近づいたり、絶対にしないのに。

頭の中をぐるぐると、いろんな思考が駆け巡る。

逃げたら、悪いことしたひとみたいだし。謝るのも変だし。

「じょうず、だね」

結局、優花の口をついて出たのは、そんなひと言だった。

どきん、どきん、と心臓の音。固まったように立ち尽くす優花に、その子は不思議そうな顔を見せたあと、

「ありがとう」

そう言って、照れくさそうにはにかんだ。

2・誰だと思っ?

「名前、なんていうの?」

尚もぼつと立ち尽くす優花に、その子がたずねる。

「……ゆか。神崎、優花」

「そっか。ぼくは木野啓太だよ」

きの、けいた。

あ。男の子なんだ。

名前を聞いて優花が真つ先に思ったのは、そんなちよつと失礼なことだった。

「優花ちゃん、ひま? ここ座る?」

優花の内心を知る由もなく、啓太がぽんぽんと自分の左隣をたたく。

父と兄のことが脳裏をかすめたのは、ほんの一瞬だった。

「うん」

優花はうなずいて、啓太の左隣に腰を下ろした。知らない子と話すのは大の苦手なのに、どうしてか、この子とはもつと話してみたい気がした。

「優花ちゃんは、何年生?」

「二年生」

「あつ、二年なんだ。ぼくは三年」

三年生。ひとつ年上。

だからだろうか。啓太はクラスの男の子たちと雰囲気が違う。からかったり、蹴りを入れる真似をしてくる男の子たちとは、全然違う。

「えつと……それ、描かないの?」

啓太のひざの上に置かれたスケッチブックを指差し、優花がたずねる。絵を描くのを邪魔してしまったようで、すこし申し訳なかつ

た。

「じゃ、描こうかな」

そう言って啓太は、ふたたび絵を描き始めた。覗き込むようにして啓太の右隣を見ると、そこには黒いケースに入った色鉛筆セットが置かれている。優花が持っている十二色のものなんて比較にならないほど、たくさんの色。百色くらいあるだろうか。

こんなに、たくさん色があるんだ。

優花は感嘆し、つづけて思う。

だから、きれいな絵が書けるんだろうな。

だけど、自分が同じ色鉛筆セットを持っていたとしても、きつとこんな絵は書けない。

啓太は焦げ茶色の色鉛筆をケースに戻し、青みがかった淡い黒色のものに持ちかえた。そして、ジャングルジムのずっと向こうの芝生、木製ベンチの上に色を塗ってゆく。

「それ、なに？」

「なんだと思う？」

聞いたのに、逆に聞き返されてしまった。

優花はじつと啓太の手の動きを凝視する。

だんだん、分かってきた。人間のかたちをした黒い影。肩幅が広くて、髪が短いからたぶん男のひと。

「ベンチに、ひとが座ってるところ」

「当たり前」

「だれ？」

啓太はすこし考えるそぶりをしたあと、いたずらっぽく言った。

「誰だと思う？」

ほとんど間を置かず、優花は口をひらく。

「お父さん。ジャングルジムから、子どもが落ちないように見ているの」

なんとなくその影が、ジャングルジムのほうを見守っているように思えて。だから、優花はそう答えた。

すぐに答えが返ってきたことが意外だったのか、啓太は一瞬驚いたような顔をした。けれど、その表情はすぐ、意味深な微笑に取って代わる。

「さあ、どうかな」

「じゃあ、サラリーマンのおじさん。おひるに休んでるところ」

「うーん、と啓太が仰々しく首をひねる。

「お兄さんが、彼女を待ってるってこと。……あつ。ゆうかいはんが、子どもを狙ってるってこと」

声はずませる優花を見て、啓太が今度は噴き出した。

「なんで誘拐犯なの？」

笑いながら言って、それから感心したふうにつけ加える。

「よくそんなすぐ、いろいろ思いつくね」

「ふつうだよ」

この公園で、実際にそんなひとたちを見たことがあったから、思いついただけだった。もともと、誘拐犯は例外で、最近報道されていた誘拐事件のニュースを思い出したのだけだ。

「それで、答えは？ せいはいはある？」

口早に問う優花に、啓太は含み笑いを浮かべた。

「ひみつ」

えー、と優花は口をとがらせる。教えてとせがんでも、啓太は軽く受け流すだけだった。

ほんとは、正解なんてないのかな。

優花がそんな考えに至ったそのとき、子どもたちのはしやぎ声や笑いさざめく声に混じって、父が自分の名前を呼ぶ声がかすかに聞こえた。前を向くと、ジャングルジムのずっと向こう、こちらに向かってくる父と兄が視界に映る。気まぎれになって優花は小さく肩をすぼめた。

「お父さん？」

「うん」

「ふうん」

黙ってそばを離れたことで叱られるかと思っただけで、父は特に怒っている様子を見せなかった。もっともそれは、啓太が隣にいるからかもしれないけれど。

「優花の友達かな？ 優花と遊んでくれてありがとうね」

父に声をかけられて、啓太はなにやら複雑そうな面持ちでうなずいた。あわてたように色鉛筆をケースにしまつて、スケッチブックと一緒に両手に抱えるようにして持つと、ぴよんとベンチから立ち上がる。

「ぼく、帰るね。そろそろご飯の時間だし」

「また、ここに来る？」

優花が咄嗟にたずねると、

「うーん、どうかな。来るかも」

気のない返事を寄こし、啓太は走り去ってしまった。

あーあ。行っちゃった……。

小さくなつてゆく背中を、優花は残念な気持ちで見送った。

でも、ここに来れば、また会える。根拠はないけれど、そんな予感めいたものを感じていた。

3・大嫌いな帰り道

じりじりと日差しが照りつける、閑静な住宅地。かちゃかちゃとランドセルの金具が立てる不快な音と、数人分の靴音がこちらに迫ってくる。それから、忍び笑いのような声。

優花はきゅうつと胸が締まるのを感じた。手のひらが汗ばんでいる。視線を落とし、歩く速度を上げた。振り返ったら相手の思うつぼだ。

「おーい、神崎！」

「いっつも、歩くの早いな」

「そんな急がなくてもいいじゃん」

三人の男子クラスメートが、口々に喋りながら優花の左右を取り囲む。優花はなにも答えず、下を向いたまま黙々と歩いた。

「返事しろよ」

「耳、ちゃんときこえてる？」

「せっかく話しかけてるのに。なんでしゃべらないの？」

返事をしたらしたで、今度はおどおどした様子がおかしいとかわれるのは分かっている。だから、優花は口をつぐみつつけた。

「おまえ、宇宙人だろ」

ひとりが悪意に満ちた、いやな笑いを浮かべて言った。宇宙人が最近のお気に入りらしい。

「あつ。だから、日本語話せないんだ」

別のひとりが、大発見でもしたような口調でわざとらしく合の手を入れる。どっと笑い声上がる。優花は唇を噛み締めて、ひたすら歩を進めた。

ほんと、ばかみたい。

目元にぐっと力を入れて、溢れそうになるものを押しとどめる。

だから、こんなことで泣くなんて、恥ずかしいよ。

しばらくして、ようやく別れ道が見えてきた。優花はここを左に折れる。男子たち三人は直進だ。

「じゃあなー」

「また月曜にな」

にやにやししながら自分を見ている三人を無視して、優花は道を左に曲がった。ふざけあう三人の声が遠ざかり、静寂が戻ってくる。

時間がもっと早く流れないかな。夏休みになったら、会わなくてすむのに。

無理な願いだと分かっているながら、心の中でつぶやいて、こめかみににじむ汗を乱暴にぬぐった。

閉ざされた黒い門の前に来たところで、優花は立ち止まった。

自分の背丈くらいの高さの扉越しに、ドアを見やる。そろそろ家事が一段落した母が、テレビのワイドショーでも眺めている頃合いだろう。

小さくため息をつく。家に入る気になれなかった。

靴がアスファルトに張り付いてしまったかのように、足が動かない。

最近こういうことが多かった。母と顔を合わせたくなくて、家に入るのをためらってしまう。

けっして母が嫌いというわけではない。ただ、母の笑顔を見ると、やさしい声を聞くと、ふいに泣き出したい衝動に駆られる。けれど、ひとたびそんなことをしたら、自分の中のなにかが壊れてしまう気がして。優花にはそれが怖かった。

肩ベルトをぎゅっと握り、ランドセルを背負いなおす。そして、優花は扉をひらいた。

玄関ドア、それからリビングにつづくドアを開けると、母は案の定ソファにもたれてテレビを見ていた。

「ああ、優花。おかえり」

「……ただいま」

「今日は暑かったでしょ。お茶でも飲む？」

うなずいて、優花はソファ脇にランドセルを下ろした。台所に向かう母を目で追う。

麦茶をグラスに注いでいる母を見ると、胸の奥からなにかが込み上げてきた。なにかもをかなぐり捨てて、すべてを吐き出してしまいたくて　息が詰まりそうになる。

「わたし、公園行ってくるね。友だちと遊んでくる」

気がつくともう言い置いて、優花は足早にリビングを出ていますぐ出かけるの？　暗くなる前に帰ってくるようにね、と母の動揺した声が後ろから飛んでくる。

スニーカーを履き、つんのめるように表へ出た。心臓が早鐘を打っている。

うそ、ついちゃった。

後悔がどつと押し寄せてくる。

遊ぶ約束なんてしてないのに、どうしよう。

途方に暮れながらも、ずっとここにいるわけにはいかないと自分を奮い立たせ、優花は歩き始めた。

4・また会える

ひとりでも目立たないところ。足を休めることのできるころ。

優花の行動範囲内で、そんな場所はごく限られている。自然と足は、近くの公園に向かっていった。

十五分ほど歩いただろうか。

やっと目的の場所に着いて、優花は周囲に視線をめぐらせた。遊具の集まっている箇所に目を向けると、優花より小さい子どもたちがすべり台やシーソーで遊んでいる。その付近では、母親らしいひとたちが何人かで集まって話をしていた。平日の昼すぎという時間ゆえ、自分と同年代の子どもや、自分より年上の子どもも姿は見当たらない。

優花は迷った末、まわりにもあまりひとがいない、公園を囲んでいる歩道のそばのベンチに座った。

空には雲ひとつなく、他にさえぎるものもないため、さんさんとした陽光が半袖から出た腕を射る。優花は見るともなしに風景を眺めながら、どうしようかと思案に暮れた。ずっとここに座っているのは退屈だけれど、あまり早く家に帰ると、母に不自然に思われるだろう。

どうして嘘なんてついってしまったのだろう、とふたたび後悔がせり上がってきて、胸がふさがる心地がした。そのとき、

「あれ？ 優花ちゃん？」

と、男の子の声。

どきりとして横を振り向くと、知っている顔がそこにあった。

「けいた、くん」

たった一度だけ、話をした男の子。

また会えたらいいとは思っていた。けれど、いまはその思いよりも、気まずさのほうがまさっていた。

啓太は特に断りも入れず、優花の隣に腰かける。そして予想通りの質問を投げかけてきた。

「ひとり？ 友達、待ってるとか？」

優花はうつむいて、渋々小声で答える。

「ううん、待ってない……」

そうなんだ、と啓太は穏やかに相づちを打った。そしてひざの上で、持っていた黒いケースを開ける。突っ込んだこと どうしてこんなところに、ひとりでいるのかだとか を聞かれなかったことにほっとしつつ、優花はケースの中を見た。この間と同様、色とりどりの鉛筆が整然と並んでいる。

啓太はケースを自分の右隣に置くと、今度はスケッチブックをぱらぱらとめくり始めた。あじさいの濃い紫、うさぎの目の深紅、たそがれてゆく空のオレンジ……さまざまな色が、優花の瞳にうつる。白紙のページを見つけ出すと、啓太は渦巻き状の金具を境にしてスケッチブックを折った。茶色がかった黒い色鉛筆を持ち、迷いのない手つきでなにかを描き始める。

「……犬？」

「うん。あそこにいるやつ」

啓太の視線を目で追うと、そこには飼い主とボール遊びをしている柴犬がいた。

優花はスケッチブックに視線を戻す。啓太は「おすわり」のポーズを取った柴犬を描こうとしているらしい。

あんなに動き回っているものを描けるなんてすごいなあ、と感嘆しながらさらさらと紙上をすべる色鉛筆を眺めているうち、ふとひとつの疑問が口をついた。

「啓太くんは、どうしてほかの男の子と違うの？」

「違うって、なにが？」

「わたしのクラスの子、みんなもつと、うるさいの。授業中ず

つとおしゃべりしてるし、今日だってけんかして、つくえを倒したりしてた」

教室中を走り回ったり、大声で騒いだりしている子ばかりで、啓太のように静かに絵を描いているような子なんて、ひとりもない。もしかして、学年が上がったらそういう男の子が増えるのかな。そんな期待が頭をかすめたけれど、それは啓太の言葉によってまたたく間に打ち砕かれた。

「ぼくのとも、そんな感じだよ。どこもいっしょだね」

ひとつ年が上がったくらいでは、なにも変わらないらしい。当たり前前といえば当たり前のことだった。

優花はため息を漏らし、ほかに、と言葉を継ぐ。

「いやなこと言ったり、消しごむをちぎって投げてきたりする」

学校であつた快くない出来事がまざまざとよみがえってきて、優花はそれを振り払うように、もう一度大きくため息をついた。

「なんで同じ男の子なのに、違うんだろう」

「さあ。単に、ぼくがへんなんじゃない？」

あっけらかんと言う啓太に、優花はあわてて否定の意を示した。

「啓太くん、へんじゃないよ」

「そうかな。ぼく、へんとか変わってるのかって、よく言われるよ」

「そうなの？」

意外に思ってたずねると、啓太はやれやれ、といった様子で肩をすくめる。

「全然外で遊ばないで、絵ばっかり描いてるのが、女みたいなんだって」

「……いやじゃない？」

「無視してる。動きまわるのって好きじゃないもん。合わせるの、めんどろ」

あ、いっしょだ。わたしも、動きまわるの好きじゃない。

それが妙に嬉しくて、優花はすこし声ははずませた。

「わたしも好きじゃないよ。外で遊ぶより、本を読んだり、お話を

考えたりするほうが好き」

「どんな話を考えるの？」

啓太が初めて顔を上げ、興味深げに聞く。

「んつと……いろいろ」

優花は退屈なとき、自分の考えた物語をノートに綴っていた。

頭の中だけに広がる空想の世界。現実には絶対にないと分かっているけど、そんな世界に思いを馳せるのが、優花は好きだった。

普段はノートに文章を描き散らしているだけなのだけれど、啓太と出会った日の夜にふと思いつき立ち、絵本のようにページごとに挿絵を入れてみたことがある。けれど悲しいかな、優花は絵を描くのが得手ではない。啓太の絵とは比べ物にならない、自分の絵の下手さに嫌気がさして、優花は結局その物語を途中で放棄してしまった。

そのことを話すと、啓太は大笑いをして言った。

「絵は、ぼくが描いてあげるよ」

本気で言っているのか、ただの冗談なのかは分からなかったけれど、なんとなく嬉しくて、優花は大きくうなずいた。

それから、ふたりでぼつりぼつりとたわいのない話をした。

それで分かったことだが、学区が違ったらしく、啓太は優花と違う小学校に通っているようだ。

いっしょの学校だったらよかったのに。そう思ったけれど、言ってもどうしようもないことだから、口には出さなかった。

公園を照らす陽光がやわらかさを運び、オレンジがかったきた。

木々や遊具の影が細く、長く伸びている。遊んでいた子どもたちがひとりまたひとりと家へ帰ってゆき、いつしか公園内の人影はずいぶん減っていた。

「わたし、帰らなきゃ」

はっと、行き先も告げずに家を出てきたことを思い出し、優花はあわてて立ち上がった。

「そっかあ。またね」

のんびりと答える啓太に、心配になって問いかける。

「啓太くん、帰らないの？ 遅くなると、お母さん怒らない？」

「もうちよっと、ここにいるよ」

うちの母さん、ぜんぜん怒らないんだよね。

そう言つて、啓太は目を細めて笑つた。母親というのは、みんな自分の母のようにちよつとばかり口うるさいものだと思つていたから、優花はなんだか不思議な気持ちにとらわれた。

最後にと、一番気になつていたことをたずねる。

「また、ここに来る？」

「うん。来るよ」

優花は思わず顔をほころばせた。今度は、「来るかも」などという曖昧な返事ではなかった。

「じゃあね。ばいばい」

手を振つて身をひるがえし、自分の影を追いかけるようにして家路を急ぐ。

今度は、わたしのノートも、持つてこよう。

期待にも似た、はやるような思いが心を満たしていて。

胸につかえていたものは、いつの間にかすんとどこかに落ちていた。

*

その一週間後。三度目に公園で会つたその日、優花は物語を綴つたノートを啓太に見せた。

啓太は約束した通り、そこに広がる世界をスケッチブックに描いてくれた。淡い色彩の、やさしい絵。

以来、啓太と優花は互いの世界を見せ合うようになった。月に四、五回この公園で、スケッチブックとノートをそれぞれ持参して。

5・不釣り合いな名前

「この前見せてくれた話って、こんな感じ？」

横に座っている啓太が、太腿の上でスケッチブックをひらく。優花はそれをのぞき込み、大きくうなずいた。

「うん。そんな感じ」

淡い水色と灰色の中間を取ったような空。深緑の木々を飾る真綿のような雪。

一面の銀世界は、まさに優花のイメージどおりだった。啓太はいつも、優花の空想していた世界にぴたりと当てはまる絵を描いてくれる。一年前から、ずっと。

「啓太くん、こんなふうに雪が積もってるって、見たことある？」

「ううん、ないよ」

「じゃあこの絵、想像で描いたんだ」

「あ、でもテレビで見たことはあるから。あるって言えばあるかも」
啓太らしい、やわらかい色彩。優花は吸い込まれるようにそれに見入った。

現実にも存在してもおかしくない風景なのに、その絵からは、この世界のものではないようなどこか幻想的な印象を受けた。それは、優花の物語を映し出したものであるという、先入観があるからかもしれないけれど。

「わたしも、写真とかテレビでしか、こういう景色って見たことない」

「いつかほんとに見たいね」

「うん」

ほんとうの雪景色は、どれくらいきれいなんだろう。一度も行ったことのない雪国の風景は、果てしなく遠かった。

「いつも思ってたんだけど。優花ちゃんって、字、きれいだよね。ぼくとは大違い」

優花が持ってきたノートの最初のページを見ていた啓太が、思い出したように言った。

「啓太くんは、字が汚いの？」

聞き返すと、啓太は顔に苦笑を浮かべる。

「うん、すっごい汚い。読めないって先生に言われたことあるし、どうやら謙遜をしているわけではないようだ。

絵と同様、きれいな字を書くのだろうと勝手に思っていたから、優花にはその言葉が意外だった。

あ、そう言えば、と啓太が声をつなく。

「字って言えばさ。優花ちゃんって名前、どんな漢字書くの？」

唐突に、しかも嫌なことを質問されて、優花は返答に窮してしまった。沈黙を別の意味で解釈したらしく、啓太は重ねてたずねてくる。

「あ、もしかしてひらがな？」

優花はあわててかぶりを振って、仕方なく口をひらいた。

「えっと……にんべんに憂いって字で『ゆ』」

憂と言う字を指で手のひらに書いてみせると、啓太はああ、と声を漏らした。

「やさしいって字だっけ」

「……それと、くさかんむりに化けるって字で『か』」

啓太のコメントをあえて無視し、いやいや説明をつづける。と、

啓太が今度は嘖き出した。

「はなって字でしょ？ なにその説明の仕方」

変な説明だとは自覚している。

だけどこれは、漢字本来の意味を打ち消すための、優花にとっては苦肉の策だった。

やさしくて、花みたいに可愛らしい女の子になるように。そんな

願いを込めてつけた名前だと、母は以前優花に語った。以来、優花は自分の名前が嫌いになった。

やさしくも、可愛くもないのに。どうして、こんな名前にしちゃったの。

似合わない、不釣り合いな名前。

無意味だと分かかっていても、母に苛立ちをぶつけたくなる。そして、そんな思いを抱いてしまう自分が嫌になる。

話題を切り替えようと、優花は啓太にたずね返した。

「啓太くんは、どんな字を書くの？」

「『た』は太いで、『けい』は……ええと、こういう字」

啓太が自分の手のひらを指でなぞる。それで合点がいつて、優花はうなずいた。学校で習ったことはないけれど、この字は知っている。確か手紙の初めに書くあいさつ、拝啓という言葉に使われる『けい』の字だ。

それから、クラスにいる変わった名前の子のことだとか、「画数の多い名前は書くのが面倒だということに、話は流れていった。

「……あれ。こんなシーン、この前あったっけ」

一枚いちまいノートをめくっていた啓太が、一番新しいページを見て怪訝そうにつぶやく。

「あ、それ？ 前見せたときはなかったよ。なんとなく、つづきを書きたくなったの」

優花が前回啓太に見せたのは、雪の妖精の話だった。あたたかい春の日、雪の妖精の死を思わせる場面でしめくくられていた物語。そのつづきとして、別の雪国で、また妖精が目覚める場面が追加されている。どうも終わり方に納得がゆかなくて、昨夜書き足したものだ。

啓太がゆっくりとノートに視線をすべらせてゆく。

「うーん……優花ちゃんってさ」

間もなくすべて読み終えたらしく、啓太がぼそりと言った。

「なに？」

「あ、やっぱりいいや」

「えっ、なに言おうとしたの？ 途中でやめられたら気になるよ」「やっぱりつづきなんて書かないほうがよかったのかな、と優花はすこし不安になった。

実は昨晚、ノートをのぞき込んできた兄に言われたのだ。「ちょっと蛇足っぽい気がする」と。蛇足は余分なものという意味だと、優花は知っていた。

追及する優花を、啓太はやんわりと制する。

「気にしないでいいよ。別に、たいしたことじゃないし」

それから、にこりと微笑んだ。

「ぼくは好きだよ。この話」

「……ん。ありがとう」

啓太くんは、ずるい。

啓太のこういふ顔を見たとき、優花はくすぐったいような、悔しいような、妙な気持ちになる。

そして、それ以上にも言えなくなってしまふ。

ひとや遊具の影が長くなり、陽光が黄色味を帯び始めた。そろそろ、帰らなければならぬ時間だ。

学年が上がって授業時間が延びたせいで、去年よりも啓太といっしょにいられる時間が短くなった。来年になればもっと、その時間は短くなるだろう。啓太は来年五年生だ。五年生になれば毎日六時間授業になると、啓太は以前言っていた。

優花はそれを思うと、いつも憂鬱になる。

成長、したくないなあ。

だけど時間の流れは、早まることもなければ、遅くなることもなくて。

いつだって、無慈悲なほどに淡々と流れてゆく。

6・境界のない世界

授業の合間、たった十分の貴重な休み時間。一緒に行動することの多い友人ふたりと、いつものように窓際につどう。繰り返される日常は、判で押したように変化がない。

「優花ちゃんは誰が好き？」

麻紀と話していたあやめが、はしゃいだ声で話を振ってきた。

「んー、わたしは……」

最近流行の男性グループのメンバーで、誰が一番好きかという質問。

優花は淀みなく、あやめが好きらしいメンバーの名前を答えた。

別に自分の意見を殺して、あやめに合わせたわけではない。初めから優花はそのグループに興味がなくて、だから好きなメンバーなどいるはずもない。だったら友人に合わせたほうが、好感が得られるからいいという、極めて打算的な考えでそれをした。

「だよー。ほら、麻紀ちゃんの趣味が変なんだって」

誇らしげに言うあやめに、麻紀は不服げに口をとがらせる。

「の方が背高いスタイルいいじゃん」

「でもあのひと、顔長くて馬みたいだし」

自分のひいきのメンバー、どちらが格好いいかであやめと麻紀が口論を始めた。ともに笑いながらの、じゃれ合うような言い合い。話についてゆけず、けれど理解しているふうを装って、優花はただあいづちを打つ。

こういうとき、優花は自分の前に、ガラスの壁がそびえているように感じる。自分にはみんなの姿が見えていて、みんなにも自分の姿が見えているはずなのに、そこには大きな隔たりがある。

優花は笑みを顔に張りつけながら、まあまあ、とふたりを取り成した。よくわかんないけど、どっちもかっこいいってことでいいじ

やん、と適当なことを言っ

て。優花は昔から、ひとの輪に入っ

てゆくことが苦手だった。それは四年生になつたいまも変わって

おらず、みんながしている遊びや話に加わるより、本を読んでいる

ほうがずっと楽しく感じる。

けれどいつもひとりきりでいると、それだけで悪目立ちして、周

囲から変わった子、厄介な子とレッテルを貼られてしまう。優花は

それを知っていた。休み時間にひとり、本を読んでいる優花に話し

かけてきた先生の、妙にやさしくて気遣うような声。活発な子に

は決して向けられない、クラスメートの男の子たちのからかい。そ

ういったものから、肌で感じていた。

みんなと元気に遊べること。誰とでも仲良くできること。

それが子どものあるべき姿であつて、だから優花が望むような振

る舞いは、周囲からすればおかしなことなのだろう。それに気がつ

いた優花はいつからか、周囲に波長を合わせようと努めるようにな

つた。暗いと思われないよう、笑つて、うなずいて。それが正しい

あり方なのだと、ほとんど無意識のうちに自分に言い聞かせながら

授業の開始を告げるチャイムが鳴つた。教室のあちこちにいたク

ラスメートが、ばらばらと各々の席に戻つてゆく。優花も、最後列

にある自分の席について、小さくため息をこぼした。

愛想笑いを浮かべて、必死にまわりに溶け込もうとしている自分

が、たまにどうしようもなく嫌になる。だけど、ひとりになるのは

もっと嫌だった。ひとりでいることによつて、まわりに奇異の

目で見られるのが嫌だった。

二時間目の授業は算数だった。黒ぶちの眼鏡があつらえたかのよ

うに似合う、線の細い男性教師が、黒板にチョークで式を書いてゆ

く。イコールのあとは空白だ。

小数の計算問題。十五分後に答え合わせをすると先生が言ったの

を皮切りに、鉛筆の芯と紙の擦れる音が教室に響く。

優花は文章問題は大の苦手だけれど、単純な計算問題ならそれなりにできる。機械的に手を動かし、早々に問題を解き終えてしまった。時間を持って余し、なんともなしに窓の外へ目をやる。

窓際にあるこの席からは、グラウンドの様子がよく見える。いまはどこかのクラスが、ドッジボールをしているようだ。茶色いボールが、外野と内野を行ったり来たりしている。女の子が当てられた。跳ねるように、ちょこちょこ外野に駆けてゆく。

優花は上方に視線をずらした。

十一月の上旬。

空気が澄んでいるこの時期、空は透明感を増して深い青色をしている。季節ごとに空は微細にその色を変える。わずかな変化を的確にとらえた、啓太の絵が教えてくれた。

空を飛んでいけたら、気持ちいいだろうな。

突拍子のない空想だと分かりながらも、そんなことを考える。

人間は魚みたいに海を泳ぐことはできるのに、どうしても鳥みたいに空を飛ぶことはできないのだろう。

空と海。……そうだ。

優花は心のおもむくままに、頭に浮かんだ言葉　物語の断片をノートの隅に書き連ねる。

ひとつにつながった空と海。鳥は海を泳げるし、魚は空を飛ぶことができる。違う種類の生き物同士が、会話することだってできる。隔たりのないその世界は、すべてを受け入れて、包み込んでくれている。

「……ざきさん。聞こえてるかな？　答えは分かる？」

はっとして顔を上げ、優花はようやくと、教室中の視線が自分に注がれていることに気がついた。怪訝そうな顔、状況を楽しんでいるような顔。

「あつ、……えっと、何番の問題ですか？」

穴にでも入りたい心地だった。なんとか消え入りそうな声で聞くと、どこかから押し殺した笑い声が漏れる。ちゃんと話を聞いてい

るようにね。先生が苦笑いを浮かべて言った。
優花は身を縮め、はい、と小さくそれに応えた。

7・繰り返し返される日常

耳馴染んだチャイムの音が校舎中に響く。

今日最後の授業の終わりを告げる音色に、教室内の空気は一気にゆるんだ。すばやく帰り支度を始める男子、隣の子とおしゃべりに興じる女子。先生が連絡事項を伝えるだけの短い終礼が終われば、すぐに解散となった。

優花はいつも通り、あやめと麻紀と一緒に学校を出た。ぶらぶらと歩きながら、他愛のないことをしゃべり合う。さしたる変化のない毎日、そうたくさんネタが転がっているわけもなく、話のテーマはいつだって限定されていた。テレビ番組の話だとか、音楽の話だとか。今日のテーマは、ささやかな恋愛話だった。

「今日、曾野くんとちよつと話したよー」

あやめが照れたように笑いながら、違うクラスの男子の名前を口にした。ああ、と麻紀が声を返す。

「昼休み、うちのクラスに来てたよね。誰か呼びに」

「そうそう、そのとき。嬉しかったあ」

「……ほんと、ちっちゃい子が好きだよな。あやめって」

呆れたように言う麻紀に、あやめは口をとがらせた。

「可愛いじゃん。あと、サッカー。すごくうまいでしょ、あの子」

ね、とあやめに同意を求められ、優花は笑ってそれに応えた。

「足速いもんね。体育のとき、いつも活躍しててすごいなって思う」

だけどわたしは、曾野くんのこと、好きじゃない。

低学年のころ『曾野くん』によくからかわれた記憶がある優花は、彼に快い感情を抱いていなかった。けれど、話に水を差すだけだと分かってから、決してその思いを口には出さない。

「男の子は背が高くなきゃ」

身長の高い麻紀が、もはや口癖のようになっていた台詞を吐いた。

「麻紀ちゃんは、背が高ければ誰でもいいわけ？」

「というか自分よりちっちゃい子なんて頼りないじゃん」

しれっと答える麻紀に、あやめは大げさな声を上げる。

「えー、そんなことないよー。小さい方が可愛くていいのに。優花ちゃんはどっ思う？」

「うーん。わたしは、あんまり身長って気にしないなあ」

いつものように笑って、あいづちを打って。ガラスの壁には、気づかないふりをして。

そうしているうちに分かれ道に差しかかった。ふたりと別れの挨拶を交わし、優花は道を左に折れる。黒い門の前までくると、それを押し開けて中に入った。

リビングのソファにもたれて本を読んでいると、間もなく兄が帰宅した。母がつくったおにぎりを、休憩もそこに胃に詰め込むと、シヨルダーバッグを肩にひっかけてふたたび家を出てゆく。そのあわただしい様子を横目に、

「六年になってから、毎日大変だよな」

ほんやりつぶやくと、母の鋭い声が台所から飛んできた。

「優花も来年から、塾に行ってもらうからね」

「えー。わたしはいいよ」

「だめだめ。お兄ちゃんみたいに中学受験しろとは言わないけど、ちよっとは勉強する習慣つけたほうがいいでしょ。高学年になるんだし」

「……勉強ぐらい、自分で勝手にするのに」

ぶつぶつと不平を洩らすと、またすぐさま母の声。

「いまできてないことが、五年になっていきなりできるようになるわけないでしょ」

もっともな指摘に、優花はぐっと押し黙った。返す言葉もない。

優花はため息をつき、本のページに視線を戻した。

いつものように母と夕飯を食べたのち、自室　正確には、兄と優花で共有している部屋　に向かう。今日は啓太とは会う約束をしていない。だから、算数の授業のときに思い浮かんだ物語を書こうと思った。

ふたりが会うのは月に数回、それも間隔を置いてだった。特に決まりごとをつくったわけではないのだけど、いつしかそんな暗黙の了解が成立していた。

学習機について蛍光灯のスイッチを入れる。それから引き出しを開け、ノートとシャーペンを取り出した。

頭を悩ませながら、大学ノートに文字を綴ってゆく。ときどき国語辞典や類義語辞書を使って、自分の中でじっくり来る言葉を探す。自分だけの世界に耽って、どれくらい時間が経っただろうか。「ただいま」という声とほぼ同時に、背後でドアのひらく音がして、優花はぎくりと肩をこわばらせた。そして、とっさに両腕でノートを覆う。

兄が部屋に入ってきて、隣の学習機にショルダーバッグをどさりと置いた。

「……おかえり」

「また、なんか書いてんのかよ」

ノートをななめ後ろからのぞき込み、兄がからかうような口調で言う。

「別にいいでしょ。お兄ちゃんに迷惑かけてるわけじゃないし」

「悪いなんてひと言も言った覚えはないけど？」

むっとする優花に挑発的な言葉を残し、兄は部屋を出ていった。

優花はノートから腕をどけ、苛立ちを吐き出すようにため息をつく。

お兄ちゃんなんて、嫌い。

優花の書く話は、いいひとばかりで嘘っぱい。

以前、兄にそう言われたことがある。確かに優花の書く話には、

「悪人」と言える存在が登場しない。だからそれは至極まっとうな指摘で、反論の余地はなかった。

けれど、それでも、優花は兄の言葉を素直に受けとめることができなかった。自分の世界を否定されたようで、ただ悔しさだけが胸にくすぶった。

優花は再度シャーペンを握る。だが、ささくれだった気分のせいで、思うように文章が書けない。

あきらめて机の上に突っ伏し、優花は目を閉じた。

現実には存在しない、果てしなく青く、境界のない世界が脳裏に浮かんだ。

8・自転車に乗って

優花は周囲を見渡し、公園を囲む歩道を通り切った。手に提げたトートバッグには、「境界のない世界」の話が描かれたノート。

啓太はすでに来て、歩道脇のベンチに腰かけている。ベンチの後ろから、優花は啓太の手元をのぞき込んだ。

熱心に描いているのは、夕暮れどきの川辺の絵だった。沈みゆく夕陽を照り返して川面が光っている。

啓太は初めて会ったとき以上に絵がうまくなった。使う画材は決まって、オリブ色の表紙をしたスケッチブックと、黒いケースに入った色鉛筆。以前、絵の具を使って描くことに興味はないのかとたずねたら、「その発想はなかった」と、本気なのか冗談なのか分からない反応が返ってきた。それからも啓太が使う画材はいつも同じ、スケッチブックと色鉛筆だ。

「けーた」

耳元で名前を呼ぶと、啓太はぱつと優花の方を振り向いた。そして、苦笑交じりにつぶやく。

「……ああ、びっくりした」

「ほんと、熱中すると気づかないよね。それ、土手から見た景色？」

啓太の隣に腰を下ろし、ほとんど目にする機会のない、県を縦断する河川を思い浮かべながらたずねる。

「そうそう。おととい行ってきたから」

優花と会わない日、啓太はたいてい外を出歩いているらしい。特に目的地を決めず、気の赴くままにあちこちをうろつく。移動手段は、自転車の場合もあれば電車と徒歩の場合もある。道に迷ってしまい、夜遅くまで家にたどり着けなくなることも少なくないそうだ。一度、警官に声をかけられたこともあるだとか。

初めてその話を聞いたとき、優花は自分のまったく知らない世界を垣間見た気分になった。そして、羨望に近い感情を抱いた。

うちのお母さん、口うるさいから、遅くまで帰らなかつたらめちやくちや怒られるよ。

そうぼやく優花に、啓太は軽く笑って言ったものだった。

まあ、心配なんじゃない？ 女の子は、夜に出歩くと危ないっていうしさ。

男の子だって危ないじゃん、と思ったけれど、啓太の諭すような声を聞くと、どうしてか反論する気がそがれてしまった。

「そっか。いいなあ」

独りごちる優花に、啓太はあいまいな笑みを浮かべる。

「別に川なんて、行って楽しいものでもないと思うけど」

「んー……そういうことじゃなくて」

あてもなく、いろんな場所に足を向けることができる。それ自体が優花にはうらやましかった。

自分がそんなことをして帰宅が遅くなったら、まず間違いなく母に叱られるだろう。

それに もしその心配がないとしても、臆病な自分には、啓太みたいなことはできない。遠く、とおくに行ってみたいと頭で考えるだけで、それを行動にうつす勇氣はない自分を、優花はよく理解していた。

どう言葉を継ごうかと考えあぐねていると、啓太はうーんと首をひねって、それからスケッチブックをぱたりと閉じた。

「よし、いまから川に行こう」

あまりに唐突な誘いに、優花は面喰ってしまった。

「え？ いまから？ もう夕方なのに」

「大丈夫、自転車で三十分もかかんないし。じゃ、自転車持って、あそこに集合ね」

啓太はさらりとそう言って、歩道を渡った先にある公園の出入口

を指差す。有無を言わせない勢いに圧倒され、優花はうなずいた。啓太がスケッチブックと黒いケースを脇に抱えて去ってゆく。その後ろ姿をぼうつと見送っているうち、ふと気がついた。

啓太と公園以外の場所に行くのは、初めてだ、と。二年前からずつとつづいてきた、一定の距離を置いた関係。そこにわずかだけれど生まれた変化。

じわじわと、やがて自分でも驚くほどに気持ちが高ぶってきて。優花は公園を出ると、啓太が去ったのと反対　自宅のある方角に向かつて、駆け出した。

玄関のドアを開け、靴箱の上に置いてある小かごから自転車のキーをつかむ。

「今日ちよつと遅くなるかもー！」

家の中に向けて大声で叫ぶと、母の返事を待たずに優花はふたたび外へ出た。玄関脇に止めてある、めったに使わない赤い自転車にキーを差し込み、スタンドを蹴って門の外に出る。サドルにまたがると、ペダルを踏んで自転車を走らせた。身体に受ける風がひやりと冷たかった。

集合場所に着くと、啓太はすでに来て優花を待っていた。青いフレームの自転車に乗っている。優花のものと同じシティサイクル。

「お待ちせ」

「ん。じゃあ、行こっか。……場所分かる？」

「ううん。あそこ、めったに通んないから」

「分かった。先に行くから、ついてきて」

言うなり、啓太がペダルをこぎ始める。優花もあわててペダルを踏み、そのあとを追った。

9・川面に揺れる月

十一月も半ばになれば、日没はかなり早い。気がつくくと、夕陽はもうほとんど地平線に隠れていた。空の大部分を覆う深い藍色と、町を縁取る茜色のコントラスト。季節ごとの空の違いは、日暮れどきに顕著になると優花は思う。こんなふうには色の境界がくつきりに見えるのは、肌寒くなり始める秋以降だけだ。

啓太が自転車のスピードを落とし、道の端で止めた。優花もその後ろで自転車を止める。

「うー……疲れた」

自転車を降り、優花は寒さに身を震わせた。ひさびさの運転ですこし息が上がっていた。

「お疲れ」

啓太は笑ってそう言うと、自転車を引いてそろそろと土手を下りてゆく。そして、傾斜が終わったところでスタンドを下ろした。優花も啓太に倣って、その隣に自転車を止めた。

「誰もいないね」

「この時間じゃね。休みの日の昼間とかは、遊んでる子がいたりするんだけど」

段ボールでここをすべったりしてさ、と啓太が草に覆われた土手の斜面を目で示しながら言う。

「そうなんだ」

優花はあいづちを打って、両手をこすり合わせた。夜になると一段と気温が下がって、指先が冷える。

「寒い？」

「ちよつとだけ。わたし、手が冷えやすいんだよね」

「そうなの？ 僕と反対だね」

啓太がジャケットのポケットから両手を出す。そして、ふわりと

優花の両手を包み込んだ。

ひゃっ、と声を上げそうになるのを、優花はかろうじて堪えた。自分よりすこし大きい啓太の手から、心地よい温もりが伝わってくる。

「あ、ほんとだ。冷たい。優花って冷え性？」

寒さのせいではない指先の震えを、気取られるのではないかと不安になっている優花に、啓太は拍子抜けするほどのほんとした口調で聞いてきた。

なんで「ちゃん付け」が恥ずかしくて、こういうことは平気なんだろう。優花は不思議に思う。

お互いの名前を呼び捨てするようになったのは、「ちゃん付け」で呼ぶのが恥ずかしくなってきた、と啓太が言い出したのが発端だ。優花はいままでこそ慣れたが、最初は照れがあつてなかなか名前を呼ぶことができなかった。そう言えば、そのときも啓太は初めから、呼び捨てになんの抵抗も抱いていないようだった。

「ん……ちよつと冷え性、かも。啓太の手はあつたかいね」

「僕、体温高いんだよね。冬でも手がかじかむことってないし」

だから、寒くても絵を描くのに困らないんだなあ。

そんなことをひとりで納得していると、啓太は優花の手をそつと離し、川に視線を向けた。もう日は落ち、川面が月光を弾いてきらめいていた。鏡みたいだと優花は思った。

啓太が自転車の前かごからスケッチブックを取り、その場に腰を下ろす。優花も啓太の隣に、ひざを立てて座った。

「貸して」

啓太からスケッチブックを受け取ると、優花は当たりをつけてページをひらいた。一回で目当てのページをひらけた。描かれた夕暮れどきの川辺が、月明かりに浮かんで視界に飛び込む。

「ちよつと、遅かったね」

藍色に沈んだ現実の空を見上げ、優花は残念な気持ちでつぶやいた。この絵のような光景を見ることは、できなかった。燃えるよう

な茜色は、もう地平線の向こうに飲み込まれてしまつて。

啓太が優花の手から、すっとスケッチブックを取つた。えっと、確か……と独り言を言いながら、ページをめくる。すぐにその手が止まつた。

「あつたあつた。一か月以上も前のだけど」

そこに描かれているのは、さつき見た絵と同様、この場所だつた。違つのは描かれたその時刻。さつきの絵では夕暮れどきだつたけれど、この絵ではすっかり夜の帳が下り、川面には欠けた月が揺らぎながらぼんやりと浮かんでいる。

優花はスケッチブックから視線を上げた。現実の川面にうつる月は揺れていて、けれど夜空に浮かぶ月は微動だにしない。

ああ、いっしょだ。

いま、自分は啓太と同じ世界を見ているのだ、と。そんな実感。

優花はわずかに頬をゆるめ、つぶやいた。

「こつちは、ちょうどいまだね」

うん、と啓太がうなづく。

「ここで描いたの？ この絵」

「ううん、家で。さすがに外じゃ、暗すぎて描けなかつた」

「写真を撮つたとか？」

「写真の代わりに、頭に焼きつける」

啓太が自分の頭を指差して、すこしばかり得意げに言った。そっかあ、と優花は小さく答える。

なんだかとても納得がいった、気がした。スケッチブックに描くのは、啓太の中で像を結んでいる情景だから。一度心に刻んだが最後、写真なんかには頼る必要はないのだろう。

「……あ。誰か立ってる」

スケッチブックの中の川岸を指差し、優花は言った。

闇の中に溶け込むようにして、たたずんでいるふうに見える人影。黒一色で描かれていて、顔立ちはまだよく分からない。

「なんとなく、描きたくなって」

誰？ とたずねても、啓太は口をつぐんだままだった。はぐらかすように首をひねるだけ。それから反対に、優花に聞き返してきた。「……誰だと思う？」

以前同じ質問をされたときのことが、すつと優花の脳裏によみがえってくる。つい最近のことみたいに思い出せるのに、もう二年も経ってしまったのだ。そう気づくとやり場のない、喪失感のような思いが胸に広がった。

それを振り払うように、優花は冗談めかして答える。

「ゆうれい」

啓太は笑わなかった。束の間、言葉を失くしたように黙り込む。

けれど、優花が名前を呼びかけようとした次の瞬間、微笑を顔にたたえて言った。

「予想外の答えだった」

いつもどおりの表情。なんとなくほつとして、優花はもう一度たずねる。

「ほんとは？」

「べつに。っていうか、誰でもいいんだよ」

先ほどと打って変わって、啓太は楽しみに言葉をつむいだ。

「家族でも友達でも……好きなひとでも」

好きなひと、いる？

以前あやめに聞かれたことを思い出す。そんなのいないよ、と優花は笑って答えた。

自分は誰かを好きになることも、誰かに好きになってももらえることもないのだと優花は思う。周りのひとと透明な壁で隔てられている自分は、いつだってどこか浮いた存在にしかたない。

冷たい風が吹き抜けて、優花は自分のひざをきゅっと抱いた。それから、はたと気づいて、それをすかさず指摘する。

「でもこれ、大人でしょ？ 大きい影だし」

「あ、そう言えばそうだね。子どもは想像できないか」

啓太は困ったように笑うと、スケッチブックを閉じて自分の横に置いた。そして、優花と同じようにひざを抱え、闇に沈む水面を見る。

「……啓太は誰を想像したの？」

川辺はしんと静寂を保ったまま。そして、啓太の答えは返ってこなかった。

10・特別な日

時間の感覚が薄れ、どれくらいこうしてじっとしていたか、分からなくなってきたころ。

「なんか、ずっと座ってるのも変な感じだね」

啓太はそう言うとおもむろに腰を上げ、ジーンズの汚れを払った。川岸に向かって歩いてゆくと、ゆっくり地面を見回してしゃがみ込む。手のひらで川べりを探ると、ふたたび立ち上がった。そして、横投げをするように大きく腕を振る。

軽い音を立てて、石が川面を小さく跳ね上がりながら駆けてゆく。一回、二回。

石が沈んでしまうと、後には波紋だけが残った。

「わっ、すごい」

声を上げる優花にも、啓太は不服そうな様子だった。

「うーん……やっぱ、この辺の石じゃ飛ばないか」

そしてまた地面に目を凝らし、大きめの石を拾い上げて投げる。一回、二回。

ぴしゃんと飛沫を上げて、いくつもの波紋を水面に描いて、石は川底に沈んでゆく。

「んー……うまくいかないな」

啓太が石を探して拾い、またひゅつと腕を振る。今度は一度跳ねただけだった。波紋が消えると、月光をたたえ、静まり返った川のみが後に残る。

優花は川辺に向かい、目についた石を拾った。啓太の真似をして、横投げをするように腕を振る。ぽちゃんと鈍い水音を立て、一度も跳ねることなく石は沈んでいった。

「優花、へた」

「しょうがないでしょ。やったことないんだもん」

「あー、ごめん」

ふたりに川面に向かって石を投げる。ぱしゃん、ぱしゃんと、水の輪を描きながら石は吸い込まれてゆく。

手のひらに収まるくらいに平べったい石が飛びやすいのだと、啓太は途中で教えてくれた。ここはいい石が少ないから、何度も跳ねさせるのは難しいということも。

その言葉どおり、優花の投げる石はすぐに水中へ消えていって、啓太の投げる石もほとんど水面を走らない。

しばらくそうやって遊んでいたふたりは、やがてどちらからともなく手を止めた。

「時間、大丈夫？」

啓太が優花のほうを振り向いてたずねる。

「あつ……そろそろ帰ったほうがいいかも」

「じゃ、帰ろうか」

「うん」

自転車を引いて、足を滑らせないように気をつけながら斜面を上り、土手の上に戻る。ふたりは自転車を引きながら、誰もいないアスファルトの道を並んで歩き始めた。自転車に乗ろうとは、どちらも言い出さなかった。

澄んだ空にたゆたう月は驚くほどに白々としていて、星はいつもより数多く見える。

優花は冷えた外気を吸い込み、そつとつぶやいた。

「またこんなふうに、ほかのどこにも行きたいな」

啓太のスケッチブックに描かれている場所、すべてを目のあたりにしたい。そんな思いから出た言葉。

けれど、啓太はゆるゆるとかぶりを振ってそれを拒んだ。

「今日は、特別」

確固とした口調で言う。

啓太が見ている世界を、自分も一緒に見ることができる。そう、思ったのに。

それが叶わないこと 啓太がそれを拒んだことが、優花の胸を締めつけた。

「……なんで？」

声を絞り出すようにしてたずねると、啓太は沈黙を挟んだあと、あいまいに笑って言った。

「最近、なんとなくだけど、元気ないように見えたから」

どうしてだめなのか、それにまったく答えていないことに対する不満よりも、気づかれていたことに対する驚きのほうが勝っていて……元氣、なかったかな」

「うん。……それに、僕もなんとなく、どこか行きたい気分だった」
「なんかあったの？」と啓太が聞いてくる。ぜんぜん大したことじゃないんだけど、と前置きして、優花は声を継いだ。

「五年になったら、塾に行かなきゃだめだって。次の冬休みには講習に行かせるって、お母さんに言われた」

「ああ、いやなんだ。めんどろだから？」

面倒なもの、確かに理由のひとつだった。塾になんて通うことになつたら、物語を書く時間も啓太と会う時間も減ってしまう。

それに、なによりも、

「わたし、塾に行つたってどうせ、お兄ちゃんみたいになれないもん」

自分は兄のように優秀な人間ではない。勉強や運動を難なくこなす、人間関係もうまく築き上げることのできる兄と自分は、根本的に違う。

それでもみんな、少しでも近づくと優花に求めるのだ。口には出さずに、けれど確かにはつきりと。

それが、優花には重かった。

「べつに、ならなくていいと思うけど」

否定するでもなく、慰めるでもなく。啓太が素っ気ない口調で言う。嬉しさと悲しさが入り混じったような気持ちに、優花は胸が詰まった。

「ただ、わたしはいまのままじゃだめなんだよ。みんなが好きなのは、お兄ちゃんみたいだから。」

「うずまく思いを心の引き出しにしまい込み、小さくため息をつく。それから優花は話題を切り替えた。」

「そう言えば啓太は、塾とか、習い事ってしてないの？」

「なにも。してないし、したこともない。」

「じゃあ、誰にも教わらずに、絵が描けるようになったってことかな。」

「だとしたらすごいな、と優花は思った。それから、すこしだけ啓太をうらやんだ。きれいな絵が描けること。いつだって、自由なこと。」

「……いいな」

「よくもないよ」

べつに、よくない。

淡々とした声色で、啓太はもう一度同じ言葉を繰り返した。

行きに上った坂が目の先に見えてきたところで、ようやくふたりは自転車のサドルにまたがった。軽くブレーキをかけながら坂を駆け下りる。

それからいくつもの信号を越えて、住宅地に入り、やっと見慣れた公園の入口にきたところで自転車を止めた。

家まで送ろうか、と啓太が申し出てくれたのを断って、優花はひとり、自宅へと自転車を走らせる。

一度離れた日常が、また戻ってきたような感覚。

それが優花にもたらしたものは、嬉しさでも安堵でもなく、わずかな寂寥感だった。

自転車を玄関脇に止めるとき、前かごに入れたトートバッグの存在を思い出した。同時に、今日は啓太にノートを見せていなかったことも。

次会ったときに見せようと考えながら、優花はトートバッグを手

に提げ、玄関のドアを開けた。

*

公園のベンチで、絵と物語を見せ合う。

啓太との関係はその日以降も変わらなかった。

ひとつ変わったのは、優花が五年生に進級してから、会う頻度が減ったこと。

塾の授業だとか宿題だとかに、時間を割かれるようになったからだった。

11・ほこりをかぶったノート

「優花、早く行こう」

ドア近くに立っている麻紀が、振り返って優花をせかす。

「うーん……ちょっと待って」

教科書やノートがぎゅうぎゅうに詰まった机の中から、ようやく音楽の教科書を見つけ出し、優花はあわてて麻紀のもとへ駆けていった。

階段を上り、すぐ右手にある音楽室に入る。音楽の授業は自由席だ。優花は麻紀と並んで、教室前方の椅子に腰かけた。譜面立ての上に教科書を置く。

五年生に進級する際のクラス替えで、優花は麻紀ともあやめとも同じクラスになった。

去年と同様、いつもは三人で行動しているのだが、今日はあやめが風邪で欠席している。そのため、今日は必然的に麻紀とふたりで行動することとなった。

「リコーダーのテストって、来週からだよね」

「うん」

「やだなあ。あたし、出席番号小さいから、すぐ順番まわってくるし」

「いやだよね。わたし、緊張しちゃって、うまく吹けないかも……」
ふっと会話が途切れる。すこしの間ののち、麻紀は沈黙を埋めるようにつぶやいた。

「なんか、あやめがいないと静かだねー」

「そうだね、と優花も笑って応える。」

おしゃべりで、いつも話題を提供してくれるあやめがいないと、確かに静かだ。会話があまりつづかない。

三人でいるときは、麻紀とあやめの楽しげなやり取りに疎外感を感じにくせに、こうしてふたりきりになると今度は沈黙が気まずい。どう転んでも自分はずまくやれないんだな、とあきらめにも似た思いで優花は自分を客観視する。

麻紀は話題を探るようにふたたび間を置き、それから打ち明け話でもするみたいに声をひそめて言った。

「いつも思っただけど。あやめって男子と話するとき、声変わるよね」「うーん……そうかな」

どっちつかずな反応を示す優花に、麻紀はたたみかけるようにつぶける。

「そうだって。こないだ、絵里とも話してたんだ。あやめって男子と話するときだけ、微妙に声高くなってるよねって。はしゃぎ方もなんか大げさだし」

日頃親しくしている友人に向けられる、罪悪感も抱けないほどのささやかな悪意。

そんなものはめずらしくもなく、そこらじゅうに転がっているというのを、優花はよく理解していた。

テレビでよく報道されている「いじめ」とは違う。本人に面と向かって悪口を言ったり、あからさまに仲間外れにしたりはしないから。ただ、本人のいないところで、ひっそりと話の種にする。ほんのすこしの嘲りを交えて。

誰も傷つかない。だから、それを厭う理由はないのだと思う。

けれど、自分もどこかで、こうして悪意の矛先にされているのだろうかと考えると、優花はたまにいてもたってもいらなくなる。見えないものに怯えても仕方がないと、頭では分かっている。怖くて仕方がなくて 不思議にさえなってくる。どうしてみんなは平気なのかな、と。

同意も否定もせず、優花は顔に笑みを貼りつけた。

相手の気分を害さず、同時に自分を穢さずに済む方法。

そのはずなのに、こうしてあいまいに言葉を受け流している自分

が、ひどく醜いもののように思えた。

チャイムが鳴って先生が教室に入ってくる。優花はどこかほっとして、先生の指示に従い、リコーダーをケースから出した。

六時間の長い授業が終わって、優花はいつもどおり、家路の途中まで麻紀と一緒に帰った。

家に入ると真っ先に自分の部屋に向かい、ランドセルを下ろす。学習機の脇にある手提げ鞆、そこに入ったクリアファイルから漢字プリントを出し、机の上に広げた。今日は学習塾で毎週恒例の小テストがあるから、それまでにこのプリントを暗記しなければならぬ。

椅子に座り、紙上に並ぶ漢字とにらめっこをしていると、ややあって母の呼ぶ声が聞こえた。プリントを片手に部屋を出る。玄関ドアの閉まる音がしたのでそちらを見れば、ちょうど兄が帰宅したところだった。

廊下を抜けてリビングに入ると、すこし早い夕飯が食卓に並んでいた。

優花は食卓につくと、家族が集まるまでのわずかな時間を縫って、プリントに視線をすべらせる。この調子では間に合わない。

必死にプリントにかじりついている優花を見て、台所にいる母が呆れ顔で言った。

「直前になってあわてないように、もっと早くから勉強しておけていつも言ってるでしょ」

母の正論に返す言葉もなく、けれど素直に認めるのも癪で、優花は無視を決め込んだ。

間もなくリビングに入ってきた兄は、優花の手元をのぞき込み、「ふうん」とつまらなそうに声を洩らした。

帰りの遅い父がいない、三人で囲む食卓。優花は夕飯を食べ終えると急いで自分の部屋に向かった。

漢字プリントをファイルに戻し、それから国語の問題集とノート

を探す。学習机の上棚を左端から右端まで確かめて、ノートは見つけられたけれど、問題集がどこにもない。

あわてて机の上に山積みになったプリントや教科書類をあさる。見つからないなどということになれば、ちゃんと整理していないからだとまた母に小言を言われてしまう。

机の上を引っかきまわしているうちに、紙の山がバランスを失い、ばさばさと雪崩のようにカーペットへ落ちた。

「ああもうっ」

時間ないのに、と苛立ちを吐き出しながら、優花は散らばったプリントやノートを拾い上げた。次いで、まだなにか落ちているのではないかと、机と壁の細い隙間をのぞき込む。

と、一冊のノートが目にとまった。指を差し入れて、ぎりぎり届く範囲。なんとか拾うことができた。

ぱんぱんと乱暴にほこりを払う。それは、表紙に科目名も名前も書かれていないノートだった。

ふいに胸の奥をくすぐられた気がした。薄れていた記憶が色彩を取り戻してゆく。

ぱらぱらとページをめくって、長い吐息を落とす。やっぱり、そうだ。内心でつぶやいた。

それからはつとして、壁に取りつけられた時計を見上げる。もう時間がない。

優花はノートを手提げ鞆に放り込むと、それを手に部屋を出た。

靴箱の上の小かごからキーを取り、いつてきますと言って表に出る。

梅雨明けの空気が、じとりと肌にまとわりつく。優花は手提げ鞆を前かごに入れると、自転車にキーを差し込み、スタンドを蹴り上げた。

授業が始まる前に、先生に問題集をコピーをさせてもらわないと。自転車を門の外まで引きながら、優花は今日これからのことを考える。

漢字、ちゃんと覚える時間なかったな……合格点取れなかったら、

また宿題増えちゃうな。

鬱々とした気持ちで、澱のように心に積もってゆく。

それを振り払うように優花は大きくため息をつき、サドルにまたがった。

塾に通じる方向、右へとハンドルを切り、ペダルに足をかける。

そのままの姿勢でしばためらった。

早くしなきゃ。今日は外出が遅くなったし、授業の前に教科書をコピーしてもらわなきゃ、いけないのに……

焦りとは裏腹に、足に力が入らない。ほこりをかぶったノートに整然と並んだ文字が、脳裏にちらつく。

優花は門越しに家の方へ視線を向けた。カーテンにさえぎられて、中の様子は分からない。中にいるふたりも同様に、こちらの様子は分からないだろう。

もう一度ため息をつく。そして、優花はハンドルを持つ手に力を込め、左に切りなおした。

12・泣かないで

最初のひとこぎは重かった。けれど、一旦勢いがついてしまえば、あとはあつという間だった。生ぬるい空気をかきわけるように、自転車を走らせる。ほどなくして見慣れた場所が視界に入った。

公園の出入り口付近の道路に自転車を止め、園内に足を踏み入れる。

暮れゆく空を背負った公園は、時間が時間だけに人影もまばらだった。同年代の男の子ふたりがキャッチボールを切り上げて、ミットと白球を手に公園を出てゆく。

優花はどうしようかと迷った末、結局いつものベンチに腰かけた。ふいに数年前、父としたキャッチボールのことを思い出す。自分はいつまで経っても、コントロールが悪いままだったことも。兄が受験勉強に時間を割かれるようになったところから、父とキャッチボールをすることはなくなった。

あのころ嫌いだったキャッチボールは、やっぱりいまも嫌いなままだけど、もう以前みたいに三人で遊ぶことはないのだろうと思うと、胸に込み上げてくるものがあった。

これからもどんどん時間は流れていって、ガラスの壁の向こうにいるひとたちはどんどん変わっていった。なのに、自分はいまもこの先も、きつと変わらない。

自分だけが置いてきぼりにされているような、漠然とした不安が影のように忍び寄ってくる。もどかしかった。けれど、なにをすればよいのかも分からない。

深く息をついて、空を仰ぐ。いつしか日は完全に沈み、公園内に人影はなくなっていた。数すくない外灯と月明かりが、あたりを照らしている。

ああ、わたし、塾サボっちゃったんだなあ。

いまになって、実感が沸き起こってくる。提出物を出し忘れるだとか、テストで悪い点を取るだとか、そんなレベルではない「悪いこと」をしてしまった。もう塾の授業は始まっている頃合いで、引き返すことはできない。

お母さんに怒られるな。……というか、お父さんにも怒られるかなあ。

不思議と恐怖心はなかった。よく言えば心が凪いでいて 悪く言えば、いろんなことがどうでもよくなっていた。

ひざの上に置いた手提げ鞆へと視線を落とす。こんな気分になっ
てしまったのは、きつとこの中身のせいなのだろう。

優花は鞆から大学ノートを取り出す。

ページをめくろうとしたとき、名前を呼ぶ声がして、反射的に後ろを振り返った。

公園の出入り口の前、薄闇にたたずむ青い自転車。見慣れた中性的な顔立ち。

「……啓太？」

「ああ、やっぱり優花か。 どうしたの？ こんな時間に
のんびりとした、けれどどことなくいつもと違う、啓太の声。

「啓太こそ、こんな時間……どこか行ってたの？」

「僕はまあ、いつもと一緒。 適当にその辺、走ってた」

自分の自転車を優花の自転車に寄せて止め、啓太は優花のもとに歩いてくる。

外灯の光もほとんど届かない、公園の隅。 けれど月明かりのおかげか、啓太の顔はよく見えた。

「で、優花はどうしたの？ 今日は塾、休み？」

質問には答えず、優花はじつと啓太の瞳を見る。

「啓太」

「ん？」

ひと呼吸置き、思い切ってたずねた。

「……泣いてたの？」

え、と啓太は声を洩らし、あとずさった。

「うわ、バレるとか、かつこわる」

そして、苦笑交じりにつづける。

「……なんで分かったの？」

「目が赤くなってるもん」

「あーそっか。そんなに赤い？ ぱつと見で分かるほど？」

啓太はあわてたようにまた一歩あとずさると、気恥ずかしそうに優花から顔をそむけ、視線を泳がせた。

「けっこう、赤いかも」

普段はぜんぜん目にする事のない、幼い子どものような啓太の仕草。思わず笑ってしまつて、泣きたい気分だったのは自分だけではなかったのだと思うと、すこしだけ嬉しくて、それから無性にやりきれない気持ちになつた。

啓太は、泣いちゃだめだよ。強くそう思っていた。

「啓太、泣かないで」

優花の言葉に、啓太はぎこちない笑みを浮かべる。

「や、いまは泣いてないって」

「ん……でも、泣かないで」

「なにそれ」

啓太がふたたび頬をゆるめる。その笑みはさっきより自然で、優花は嬉しかった。

「なんかあつたの？」

「べつに。大したことじゃないよ」

「どんなこと？」

重ねて問いかける優花に、啓太は感情のうかがえない声色で答えた。

「親とけんかしただけ」

「そっかあ」

けんかの理由も気になつたけれど、これ以上追究するのははばか

られて、優花はあいづちを打つだけにとどめた。会話が途切れるのを見計らっていたように、啓太が優花の隣に腰を下ろす。それを見届けてから、優花は半ば独り言のようにつぶやいた。

「わたし、塾サボっちゃった」

ほんの束の間の静寂のあと、そうなんだ、と啓太も独り言のように答えた。それから楽しそうに、どこかいたずらっぽい顔で言葉を継ぐ。

「優花でも、そういうことするんだ」

その表情に、ふっと肩の力が抜けた気がした。自然と顔がほころんだ。

「うん」

「なんで、サボったの？」

「なんとなく……かな。でも、ちょっと違うかも」

「どっちだよ」

そう言って苦笑する啓太は、もういつもの啓太だった。

優花は手に持ったノートを、ひらかずに啓太に見せた。簡素なデザインの水色の表紙。

「あのね。今日、だいぶ前に書いたノートを見つけたの」

「前って、どれぐらい前？」

「うーん……去年の秋に書いたから、半年以上前」

「へえ」

「啓太には見せたことない話が、最後にあって……」

「おっけ。家で読んで」

啓太はノートを受け取って、「ここじゃ暗くて読みにくいし」とつけ加えた。優花はほっとしてそれにうなずいた。いまこの場で読まれるのは、すこしつらい。

「帰らなくていいの？」

帰るそぶりをまったく見せない啓太に、そう問いかける。

「優花は、帰らなくていいわけ？」

逆に問い返されて、優花は思わず苦笑いした。啓太も笑っていた。「優花がいなくても、どうせ、ここに寄るつもりだったから」
ついでのように啓太が言う。

どうして？ と聞いても、答えは返ってこなかった。

ときどき、啓太は大切なことを自分に話してくれていないのではないかと、そんなふうに思える瞬間がある。なにかを隠されているような、はぐらかされているような。

だけど、いまのままでいいのだと思う。

自分と啓太を隔てている、ガラスの壁とは違うなにか。それを無理に越えてしまったら、啓太との関係そのものが壊れてしまう気がして、優花には怖かった。

13・変わらない自分

誰もいない静まり返った公園は、にぎやかな昼間とはまた違った。たずまいを見せている。

いつもと同じように、ふたりはぼつぼつと他愛のない話をした。最近読んで面白かった本のこと、自転車でたどり着いた知らない場所のこと。静寂をはばかりるようにすこしトーンを落としたふたりの声は、薄闇に吸い込まれていった。

「わたしのお兄ちゃん、頭いいんだよね」

沈黙をかき消す優花のつぶやきを、啓太が受け止めた。

「ああ、いつも言ってるよね」

「運動神経もいいし」

「それも知ってる」

「誰とでも仲良くできるの」

「あ、それは初めて聞いたかも」

優花は深くため息をつく。それから、声をつないだ。

「わたしは、どれも無理。だから、なんか……だめなんだよね」

「べつにいいじゃん。わざわざ比べなくても」

慰めるようにではなく、どうしてもよさそうに啓太は言う。優花は小さくうなずいた。その言葉を聞きたかった。兄の話を唐突に持ち出したのは、啓太がそう言ってくれを知っていたからだ。

「……うん。そうだよな」

けれど、胸にくすぶった思いは消えないままだった。口では納得したふうを装いながら、心では以前と変わらず、それを否定している自分がいた。

「啓太は、自分と他のひと、比べたりすることってないの？」

「ない。だって、意味ないじゃん」きつぱりと、啓太は答える。

「うーん、そうだけど……」

「っていつか僕、いろいろ変だからさ。ひとと違つとこなんていっぱいあるし、いちいち比べてるとキリないんだよ」

啓太はたまに、こういつた自虐的なことを、ごくさりげない口調で言う。もしかすると、啓太にとってこれは一種の遊びなのかもしれない。相手の反応を楽しむだけの、ささやかな遊び。いたずらっぽい啓太の笑みを見ると、そんなふうには優花には感じられる。

「時間、大丈夫？」

ややあつて啓太がたずねてきた。そう言えば、いまは何時くらいなのだろう。腕時計をして来なかったため分からないが、だいぶ長い時間話し込んでしまったように思う。急に不安になって、優花は反射的にベンチから腰を上げた。

母はいつも、塾の終了時刻になると、優花を自転車で迎えに来てくれる。もしかしたら、もう塾の前にいるかもしれない。自分を待っている母の姿が脳裏に浮かび、焦りと後ろめたさが募った。

「帰らなきゃ」

「ひとりで大丈夫？」

優花はうなずいて、それから聞き返した。

「啓太は帰らないの？」

「うーん、もうちょいしてから帰る」

「そっか。……じゃあね」

「またね。来週の木曜、ここに来ると思うし」

「うん」

優花は足早に歩道を横切り、公園の出入り口に向かった。途中で振り返ると、ベンチにぼつんと座っている啓太の後姿が見えた。いつ帰るんだろう、と気にながら赤い自転車にキーを差し込み、サドルにまたがる。

早く家に帰らなければという思いと、帰りたくないという思いがせめぎ合う。けれど、そんな優花の気持ちには構いなく、加速した自転車は間もなく家の前に着いた。

玄関脇のスペースに自転車を止める。キーを抜いて荷物かごから手提げ鞆を取り、ドアの前に立って呼吸を整えた。意を決して把手を下げ、音を立てないようにそろそろとドアをひらく。ドアが閉まるとき、予想外に大きな音がして、びっくりと肩が震えた。

キーを靴箱上の小かごに戻していると、物音を聞きつけたのか、優花と兄の部屋から兄が顔をのぞかせた。ドアで隔てられたリビングに向かって「優花、帰ってきた」と声を上げる。

優花は思わず肩をすくめた。なんでわざわざ知らせるの、と兄に苛立ちを覚える。

「母さん、すげー心配してたぞ。心配通り越して苛々してた」

兄はうんざりした様子でそう言い残して、また部屋に引っ込んでいった。

入れ替わりに、リビングへ通じるドアがひらいて、

「どこに行ってたの！」

同時に母の怒鳴り声が飛んできた。きゅつと心臓が縮んだ気がした。靴を脱ぎ、すくみそうになる足を突き動かして、リビングへと向かう。父はすでに帰宅していた。困ったような顔をして、母と優花を見比べている。

夜更かししているとき、テストで悪い点を取ったとき、物を失くしたとき……母に叱られることはしょっちゅうだったけれど、こんなに怒っている母を見るのは初めてだった。

優花が来ないと塾から電話がかかってきたこと、なにかあったのではないかと気が気でなかったこと、警察に電話しようかとも考えたこと。聞いているうちに、涙が溢れてきた。心配をかけたことに対する申し訳なさのせい、自分に嫌気がさしてしまったせいかは分からない。

なにをしていたかについては、話せなかった。啓太と一緒にいたことが知られたら、これから公園に行くことを禁じられてしまうのではないかと思えて、怖かった。嗚咽交じりの声で謝ると、母はなんとか怒りを収めてくれた。涙で濡れた目をこすっていると、父は

気遣わしげに優花の頭を撫でてくれた。もっと泣いてしまいそうになつたので、優花は父の手を振り払うようにしてリビングを出た。

洗面所に入って壁にもたれ、気持ちを落ち着かせる。ぼろぼろと涙をこぼして、泣いている自分。目の前の鏡に映る姿は、幼い頃となにも変わっていないようで、それがむしろ悲しかった。

14・仲よくなんでない

トートバッグを手に提げ、優花は所在なくあたりを見回した。平日の朝は児童でごった返している校門前も、日曜日の昼間となれば閑散としている。グラウンドのほうに目をやると、男子たちがサッカーをしたり、ドッジボールをしたりしていた。

すこしして、ふたり連れが談笑しながら、こちらに向かってきた。あやめと麻紀だった。

「優花ちゃん、早いねー。まだ十分前だよ」

そう言って笑うあやめに、優花も笑いかける。

「うん。なんか、早く着いちゃった」

腕時計を見ると、針は十二時五十分を示していた。あと十分で、約束の時刻になる。

今日は、隣の小学校に在籍しているあやめの友達（ひとつ年上で、陽子という名前らしい）と会うことになっていた。あやめと陽子は同じピアノ教室に通っていて、話をするうちに仲よくなったらしい。先日、お互いの友達を誘って、一緒に遊ぼうということになったのだそうだった。

正直なところ、優花はあまり気が進まなかった。ただでさえ面識のない子と話すのは苦手なのに、相手が年上だというから、なおのこと。けれど、断るのも気が引けて、結局こうして出てくることになってしまった。

間もなく、女の子のふたり組がやって来た。ひとりが小さく手を振ったのに応えて、あやめが手を振り返す。

「ごめん、遅れて」

「いいよー、あたしも来たばかりだし」

「もうみんな揃ってる？」

「うん」

全員が集まったところで、まずは自己紹介をすることになった。順番に一人ひとり、自分の名前を言ってゆく。そして優花の番が終わったとき、ふいに陽子が口をひらいた。

「優花ちゃんってときどき、うちの近くの公園にいるよね。あたし、習い事行くときとか、よくあそこ通るんだけど」

思わず顔がこわばった。近くの公園。あそこにいるのは、啓太と会っているとき。

「あ……そうなんだ。知らなかった」

答えながら、それ以上なにも言わないで、と優花は心の中で祈った。知られたくない。こんなところで、話の種にされたくない。

けれど、陽子は意味ありげな笑みを浮かべ、言った。

「いつも、六年の男子と遊んでるよねー」

「え？ そうなの？ 初めて知ったあ」

あやめが好奇心に声をはずませる。優花はどくどくと心臓が脈打つを感じた。別に、隠れて悪いことをしているわけではない。だから、知られてもなんの問題もないはずだった。

けれど、優花はどうしても、それを受け入れられなかった。

啓太と過ごすひとときは、優花にとって特別だった。いつもの毎日から離れられる、大切な時間。それをこの場で、みんなに知られてしまう。その事実息が詰まりそうだった。

「木野啓太って名前でしょ」

陽子がどこか得意げに言う。動揺を悟られないよう、優花は努めて平静を装ってたずねた。

「知ってるの？ 同じクラスになったことあるとか？」

「うん、いま一緒のクラス。あいつ、けっこう目立つんだよね」

陽子はそう言うと、今度は優花以外のみんなに向けて声を継いだ。「すごい暗い、っていうか変な子でさ、話しかけてもほとんどしゃべんないの。授業中ぼうつとしてて、先生に怒られても無視しちゃうし。なに考えてるのか分かんないんだよね」

「あー、そういえば私も、一、二年のとき木野くんと一緒にのクラス

だったなあ。どんな子だったかは忘れたけど、しょっちゅう絵を描いていたの、覚えてる」

陽子の友達の智美が口を挟む。陽子はそうそう、と声を上げた。「描いてるかいてる！ それでよく、放課後とか学校に残ってるし」どこで知り合ったの？ とあやめが聞いてくる。

なんで、そんな子と仲いいの？ と麻紀が追い打ちをかけるようにたずねてくる。

優花はあいまいに笑みを浮かべ、首をかしげた。あんまり覚えてないかも、なんでかな、と言葉を濁す。答えたくなくて、答えられなくて、優花はただこの場から逃れたかった。それはできないと分かっているから、せめて早くこの話題を終わらせたかった。

けれど、みんなの興味を引けたことに気をよくしたのか、優花の思いに反して、陽子は声高にしゃべりつづける。啓太がクラスで敬遠されていること、絵を描くのが趣味であること、同じクラスの男子と取っ組み合いの喧嘩をしたことがあること。面白おかしく繰り広げられる話に、優花以外の女子はみんな、目を輝かせている。

「あと、友達に聞いたんだけど。木野のお母さん、いつも男のひと家に連れ込んでるらしいよ」

「お父さん、いないの？」

「いないんじゃないかなあ。でね、その男のひとってというのが、ひとりじゃないんだって。いつも違う男のひとと抱き合ったり、キスしたりしてるみたい」

やだあ、と智美が、言葉とは裏腹に楽しそうな声で言う。あやめと麻紀がくすくすと笑いながら、なにか耳打ちし合っている。

優花は愛想笑いを顔に貼りつけたまま、ただ会話の渦の中にいた。なにも聞きたくなかった。それなのに、ここから逃げ出すことも耳をふさぐことさえもできない。もう啓太のことを話さないで、と叫びたかった。でも、それをする勇気が自分にないことを、優花はよく理解していた。

「優花ちゃん、もしかして、そういうこと知らなかった？」

会話に加わってこない優花をいぶかしんだのか、あやめが問いかけてきた。

「うん……聞いたこと、なかった」

「そうなんだ。仲いいの？」

今度は、麻紀の声。気がつけば、みんなが話をやめて自分を見ている。

笑った表情は崩さずに、優花はとっさに言葉を返していた。

「別に、仲よくなんてないよ。いつもひとりでいて可哀そうだし、たまに声かけてるだけ」

ほかの誰の言葉よりも、自分の言葉がいままで一番、胸に鋭く突き刺さった。話題が変わったあとも、シヨッピングモールに移動することになったあとも、痛みが治まることはなかった。

初めてする友達との遠出も、普段は聞く機会のない六年生の恋愛話も、まったく楽しめなかった。みんなと別れて家路についてからも、啓太のことが頭にこびりついて離れなかった。

15・真っ白なページ

次の木曜日。学校から帰ると、優花は学習机につき、上棚から取ったノートをひらいた。なにも書かれていない、真っ白なページ。優花は机の上にひじをつくと、両手で顔を覆った。どうしよう、と心の中でつぶやく。

今日は啓太と会う約束をしている日だった。けれど、公園に行くのがどうしてもためらわれる。

いままで知らなかった啓太の一面を知ってしまったようで、後ろめたかった。これから啓太と会って、いつもどおりに話せる自信が持てない。それに、自分たちのことが、知らない子たちの間で話題に上っているのがいやだった。

啓太も、いやだよ。知らないところで、話題にされてるの……
だから、今日は会いに行かない方がいい。優花は繰り返し、自分に言い聞かせた。

その日、優花は公園に行かなかった。その次の日も、次の週も、次の月も行かなかった。時間を経るごとに、絵と物語を見せ合ったふたりの時間は遠ざかっていった。

優花は学校が休みの日に陽子たちと遊ぶようになった。その際、啓太のことが幾度となく話題に上った。優花はその都度、ひやかしの対象にされた。

「優花ちゃん、最近木野と会ってないの？」

夏休みが明けて一か月が経とうという日、智美の家にみんなで集まっているとき、陽子に聞かれた。

「なんで？」

「ときどき、木野のこと公園で見かけるんだけど、最近はいつもひとりにいるから。クラスの男子も、みんなおんなじこと言ってたし。」

あんまり会ってないのかと思ってさ」

いつもの公園は、陽子たちの通っている小学校 第二小学校の学区内にある。だから、遊びに来ている子どもの大多数は、第二小学校の児童だ。彼らが啓太や優花のことを目にしているのは、ごく自然なことだった。

「うーん……そう言えば、最近全然会ってないなあ」

「そうなんだあ。けど、優花ちゃんと木野って、実際のとこ付き合ってるんでしょ？ けんかでもしたの？」

陽子が茶化すような笑みを向けてくる。

「そんなわけないって。付き合ってるんかないし、ただ会う気が起きないから、会ってないだけだよ」

優花は苦笑してみせて、なんでもないふう質問を受け流した。むきになって反論したら、余計にからかわれてしまう。麻紀と智美が笑いながら、小声でなにかしゃべっているのが視界に入った。

「なんで会わなくなったの？ いろいろ聞いて、いやになっちゃった？」

「うん、ちょっと……」

あやめの問いかけに、優花はいまいな答えを返す。

みんながそうやって、わたしと啓太のことを話すから、わたしは啓太と会えなくなっただんじやん。喉元まで出かかった言葉を、必死に押し留めた。そうやってからかわれるのが、わたしも、それに啓太も絶対にいやだから……だから、会わないようにしてるの。みんな、それを知ってか知らずか、自分たちのことを話題に上げるのをやめない。それがただ、悔しかった。

家に帰ると自室に入り、学習机の上棚からノートを取ってひらいた。

真っ白なページに視線を落としたまま、記憶の糸をたぐり寄せる。啓太と最後に会ったとき、陽子たちと初めて会ったとき 確か、そのくらいの時期だ。その時期から、優花は物語が書けなくなっ

しまった。いままでならふとした瞬間、泉が湧き出るように、描きたい世界が頭に浮かんできた。なのに、近ごろはそうならない。白紙を凝視していても、なんの世界も思い描けないまま、ただ時間ばかりが過ぎてゆく。まるで、泉が涸れつきてしまったみたい。

優花は泣きたい気分になった。物語が書けない。啓太とも会えない。

なんで、こんなふうになっちゃったのかな。

考えても、答えは出なかった。

16・聞きたくないのに

さらにときが過ぎて、陽子はようやく啓太のことを話さなくなつた。深い理由があるわけではなく、単純にその話題に飽きたのだろう。何にせよ、啓太の名前が話題に上らなくなったことに、優花は安堵していた。

塾をサボつたあの夜を最後に、優花は公園へ行っていない。早く啓太に会つて、約束を破つたことを謝らなければとは思っている。けれど、一度自分が誰かに見られている可能性を意識すると、どうしてもまわりの目が気になってしまい、踏ん切りがつかなかった。

「今日さあ、木野に優花ちゃんのこと聞かれたんだよね」

陽子がそう話を振ってきたのは、秋が深まつてすっかり肌寒くなつたところ、いつもの五人で智美の家に向かう途中のことだった。

久々に聞く啓太の名前に、優花の心は大きく波立った。陽子の思いがけない言葉に動揺したせい、啓太に対する罪悪感のせいかは分からない。

「あ、そうなんだ」

さりげなく、とほとんど無意識に自分へ言い聞かせながら、優花は応えた。

「そうそう。私たちが教室で話してたときにね」

智美がのんびりと言う。それを受けて、陽子は学校での出来事を話し始めた。

陽子と智美はその日、窓際で話をしていた。啓太の席は陽子たちのいた場所のすぐ近くで、啓太は退屈そうになにかの本を読んでいたらしい。

陽子はふと思立ち、会話の中で優花の名前を出した。啓太が知っている優花のことだと、分かるような情報をちりばめて。

「次の休みだけど、K公園でも行く？ あやめちゃんも麻紀ちゃんも、行ったことないみたいだし」

「ああ、確かに一小の子はあんまり来ないよね」

「優花ちゃんは、前はよく行ってたみたいだねー。夏ぐらいから全然行ってないらしいけど」

「へえ。なんかあったの？」

「知らないけど、急に公園行くの、いやになっちゃったみたいよ。なんかあったんじゃない？」

啓太の様子をうかがいながら、そうやってふたりで話をつづけると、啓太が読んでいた本から顔を上げて、陽子たちにたずねた。

「いま話してたのって、神崎優花のこと？」

そこまで話すと、陽子は堪えきれなくなったように、智美の肩を叩いて笑い始めた。智美も触発されたように、声を上げて笑い転げる。

「ああ、ごめん。それで、わたしが『そうだよ』って答えたの。したら陽子がいきなり笑い出してね」

「ほんとに食いついてきたから、笑っちゃったんだってば」

「最初から木野くんに聞かせるつもりで、優花ちゃんのこと話してたくせに」

「けど、予想通りすぎると、なんか笑っちゃうじゃん。分かるでしょ？」

鮮やかにその場面が脳裏に浮かび、優花はたまらなくなつた。嘲るように笑う陽子と智美の姿。そして、表情を失くした啓太の姿。

「優花ちゃん、会いに行つてあげればいいのに」

麻紀が苦笑交じりに言う。

優花はうつむいて、唇を噛んだ。そうしないと、悔しさや悲しさでどうかなつてしまいそうだった。

なんで、そんなことするの。

他人に迷惑がかかるような、悪いことをしていたわけじゃない。

ただ、ときどき公園で会っただけなのに。

理由なんて、とつくに分かっていた。面白いからだ。誰かを貶めて嗤うことが、ただ楽しくて仕方がない。

苛立ちが膨れ上がって、胸を圧迫する。優花は泣きそうになるのを堪え、大きく息を吸い込んだ。気がつく、行き場を失った感情が声になって溢れ出していた。

「会いたくないんだもん、しょうがないじゃん。なんでみんな、わたしと啓太のこと、そうやって言うの？ わたし、啓太のことなんか聞きたくないのに」

普段はおとなしい優花の突然の激昂に、みんな面食らったようだった。誰からともなく顔を見合わせ、そして苦笑する。なに怒ってるの？ 意味分かんない。そうとでも言いたげに。

優花は居ても立ってもいらなくなり、きびすを返した。

「あつ、優花ちゃん！」

あやめの声が背中に突き刺さる。みんなが後ろで、ぼそぼそと言葉を交わしているのが耳に入る。

全部聞こえないふりをして、駆け出した。住宅地をしばらく走り、くたくたになった足で家の門を通り抜け、玄関ドアを開く。自分の部屋に入ると、ドアに鍵をかけて学習机につき、その上に突っ伏した。

どうして、あんなこと言っちゃったんだろ……

後悔が胸を押しつぶす。堪えていたものが堰を切って溢れ、服の袖を濡らしていった。

17・会いたい

あの日を境に、あやめと麻紀が学校で話しかけてこなくなった。ただ、遠巻きに優花の方をうかがっては、何か言い合っている。優花はそんなふたりの様子に気づかないふりをして、ひとりきりの時間を、板書をしたノートを眺めたり机に顔を伏せたりしてやり過ごした。

突如訪れた孤独に、優花はなかなか慣れることができなかった。たった十分の休み時間でさえ、ひとりきりで過ごす居心地が悪く、授業終了を告げるチャイムが鳴るたび憂うつになる。あやめたちを通じてクラス内で妙な噂を立てられたり、陰口を叩かれているのではないかと考えると、周囲の話し声が気になって仕方がない。誰かに心中を打ち明けることもできず、もうすぐ冬休みが来るということを支えに優花は毎日を作り過ごした。

「優花って最近、例のノート書いてねえよな」

自室で塾の宿題をしていると、部屋に入ってきた兄が言った。優花が黙っていると、

「ほら、あれ。妖精がどうとか、魔法がどうとかって話」

と蛇足的な説明を加えてくる。

分かっているよ、と優花は苛立ちを含んだ声で答えた。ため息をつき、シャーペンの尻をかちかちと押す。

「書いてないけど。悪い？」

「悪いなんて言ってるねえし。なにキレてんだか」

兄が優花の隣の学習机につき、上棚から問題集とノートを取る。

近ごろ自分が変に気短になったことを、優花は自覚していた。むやみに刺のある物言いをしてしまったことを反省して、今度は落ち着いた声で言う。

「なんか、書けなくなっちゃったんだよね。話、思いつかなくなっちゃった」

「へえ」

「ばらばらと問題集をめくりながら、兄が気のない返事をする。と、思い出したように付け加えた。

「今度はもつと、現実味のある話でも書いてみれば？」

「どういうこと？」

言葉の意図が分からずにたずねると、兄は優花の方へ視線を投げ、改まった調子で言った。

「優花の話は、きつい言い方すると、きれいごとだろ？ 悪いやつは改心するし、誰も不幸にならないし」

優花が口をつぐんでいると、兄はそれを肯定の意として受け取ったのか、さらに話をつづけた。

「けど、現実はそのなことないじゃん。いいやつが幸せになるって限らないし、悪いやつがずっとだめなままってことも、普通に多いし」

兄が椅子の背もたれに身体を預ける。ぎい、と軋んだ音がした。

「だから、たまにはきれいごとじゃない話……もつと現実に起こりそうな話を書けば、書きやすいんじゃないかって思ったんだけど。

まあ、それだけ」

投げやりな口調でそう締めくくって、兄は前へ向き直った。そして塾の宿題に取り組み始める。

優花は計算式で埋まった自分のノートに視線を落とし、独り言のようにつぶやいた。

「でも……それじゃ、だめだよ」

現実がそうでないならば、せめて空想の世界だけでもきれいなものであってほしい。優花の書く物語は、そんな願いを反映したものだ。だから、兄の言うようにしてしまったら、意味がない。

「じゃあ、優花の好きなようにすれば。俺は別に無理強いする気ないし」

「……うん」

答えたとき、ふいに啓太の顔が頭をかすめた。空想でしかない優花の世界を受け入れ、目に映るかたちで描き出してくれた啓太。ひとつの想いが募り、じわじわと心を浸してゆく。

会いたい。

以前までと同じように接することができるだろうかという不安よりも、約束を破ったことに対する後ろめたさよりも、いまはその想いが強かった。

啓太に、会いに行こう。

内心でそう、決意を固めた。啓太と会わなくなっただけからずっとわだかまっていたものが、ゆっくりと解けてゆく気がした。

翌日は塾がない日　奇しくも、啓太と次に会う約束をしたのと同じ、木曜日だった。優花は学校から帰ると、さっそく公園へと足を運んだ。入り口から園内を見渡したが、啓太の姿は見当たらない。陽子に見つかりにくいように、奥まったところにあるベンチに腰かけて日が落ちるまで待ってみたが、最後まで啓太が来ることはなかった。

その日以降も、休日を含め塾のない日はしばしば公園へ向かったが、結果はやはり同じだった。結局会うことの叶わないまま、学校は冬休みに突入してしまった。

あやめたちと遊ぶことがなくなったため、優花は塾と家の往復とその合間を縫って公園を訪れることで毎日を過ごした。いつか来るはずだというかすかな期待にすがって、しばらく園内のベンチで待つ。会うことができず、落胆して家路につく。その繰り返しだった。

もう、公園には来ないのかな。

かじかむ指先を吐息で温めながら、優花はこの場所で幾度となく不安にとらわれた。やがて冬休みが明ける頃には、その不安は諦めへと変わり果てていた。けれど、いまできることはこれしかないのだと、自分を奮い立たせた。

そんな毎日を過ごしていたある日。

いつもように終礼が終わるとすぐ、優花は足早に教室を出た。

「優花ちゃん！」

昇降口で上履きをスニーカーに履き替えていたとき、ふいに後ろから名前を呼ばれた。聞き慣れた、けれど自分に向けられなくなつて久しい声。

顔を上げると、自分と同じくランドセルを背負ったあやめが、す

こし緊張した面持ちでこちらを見ていた。

「……あやめちゃん」

動揺で二の句が継げずにいる優花に、あやめはためらいがちにたずねる。

「優花ちゃん、急いでる？　いつしよに帰れたらいいなって、思ったんだけど……今日、麻紀ちゃん学校休んでるし」

優花が小さくうなずくと、あやめは顔をほころばせ、「よかったあ」とため息のように言った。ふたり肩を並べて、まだそれほど人影の多くないグラウンドを横切り、校門を抜ける。

「こうやって話すの、久しぶりだね」

しばしの沈黙ののち、あやめが言う。優花は黙ってうなずいた。言葉がうまく出てこなかった。　なんで、急に話しかけてきたんだろつ。

「あのね、陽子ちゃんたちのことなんだけど」

おずおずとあやめが話を切り出す。聞きたくない名前に、心臓が早鐘を打ち始めた。嘲笑うような陽子の声が、頭の中で反響する。最後に自分が声を荒げたときの、みんなのあっけにとられたような顔が思い出される。

「優花ちゃんに、けっこういやなこと言ったりしてたでしょ。えっと……木野くんのことです」

「……うん」

再び沈黙が落ちる。と、強い風が吹いて優花の髪を乱した。コートポケットに突っ込んだ手が、じんじんと痛い。風が治まると、それを待っていたようにあやめが口をひらいた。

「優花ちゃん、いやがってるかなって思ったんだけど、みんな面白がってるし……陰でも、優花ちゃんと木野くんのこと、いろいろ言ってたの。あたし、あんまりああいうの好きじゃないんだけど、陽子ちゃん年上だし、ピアノでいっしょだし、なんか逆らいにくくて」

一気にしゃべって、それから目を伏せ、消え入りそうな声でつけ

加えた。

「ごめんね」

息を吸い込むと、冷たい空気が胸に沁みた。面白がってる。陰でも。そうだろうとは思っていた。それでも、自分以外の人間の口からはつきりと言われると、心が痛かった。

けれど、ここであやめを責める勇氣なんて自分にはないし、それ以前に責める気が起きない。すこしでも、あやめがこうして自分を気にかけていてくれたことが、謝ってくれたことが、悔しいほどに嬉しかった。

「いいよ、そんなの。仕方ないもん」

優花はわずかに笑って答えた。無理につくったものではない、自然と口をついて出た言葉だった。

あやめがありがとう、とつぶやく。そして、屈託のない笑みを浮かべた。

「木野くんとは、最近会ってないの？」

もうすぐ分かれ道に差しかかるうというとき、あやめがぽつりとたずねてきた。

「うん、全然。……最近、公園にも来てないみたいだし」

そっか、とあやめがあいづちを打つ。何かを考えあぐねるような間を置いたあと、言った。

「木野くん、最近は放課後、ぎりぎりまで学校に残ってることが多いんだって。陽子ちゃんが言ってた」

「そうなんだ」

きっと自分が啓太に会いたがっていることを察して、教えてくれたのだろう。

放課後、学校。優花はその言葉を、心の中で繰り返した。

あやめと別れて家に着くと、ランドセルを自室に投げ捨てるように置いた。いまから出かけること、帰りが遅くなるかもしれないことを母に告げると、返事も待たずに再び表へ出る。陽子たちと遊ぶ際に何度か行ったことがあるから、第二小学校の場所は分かっている。迷いなく、その方角へと歩を進めた。

今度こそ啓太に会えるかもしれないという期待と、陽子たちと鉢合わせてしまうのではないかという不安が、胸のうちで葛藤していた。ときどき速さをゆるめて、疲れた脚を休ませながら歩く。やがて第二小学校の正門が見えてきた。

陽子たちがはいはしないかと周囲に視線を配りながら、あちこちで児童が遊んでいるグラウンドを横切り、校舎に足を踏み入れる。もう児童はみんな出てしまったのだろう、昇降口はがらんとしていた。優花はそこでようやく、自分が上履きを持ってきていないことに気がついた。構わずスニーカーを脱いで、近くにあった靴箱の上に置いた。

靴下を履いているとはいえ、冬場の上履きなしの格好でいるのはつらかった。リノリウムの床から冷たさが伝わり、足がしびれるように痛い。左右に目を配るが、やはりひと気はない。近くにある教室の表示板を確認すると、二年一組だった。自分の通っている学校と同様、上の階に行くほど学年が上がるのだろうとあたりをつけて階段を上る。踊り場で、まだ残っていたらしいひとりの児童とすれ違い、心臓がとまりそうになるほど驚いた。泥棒にでもなったみたいだと思った。

三階についたところで右手の教室の表示板を見ると、六年一組を示していた。啓太のクラスはその奥、六年二組のはずだ。

緊張や不安、期待がないまぜになって、息が詰まりそうだった。

ひと呼吸置いて、引き戸のガラス越しにそつと教室の中を見やる。
いない。

中には誰もいなかった。ぼんやりと薄暗く、閑散とした教室が視界に映り込む。

引き戸の凹みに手をかけて力を込めるが、鍵がかかっているひらかない。がちがちと音を立てて手ごたえが返ってくるだけだ。

廊下の左右に目をやるが、人影はまったくない。

ここまで来てやっと、実感が湧いてきた。

啓太は、ここにはいない。

ふいに目の奥が熱くなってきた、優花は大きく息を吸い込んだ。五年生にもなつて、こんなところで泣いたりしたら恥ずかしい。そんなふうに自分に言い聞かせながら、引き戸にもたれて気持ちを落ち着かせる。

そしてふと、どこからか靴音が近づいてくることに気がついた。

泣き出しそうになっていたのも忘れて、優花はきよるきよるとまわりを見渡した。それから、自分が他の小学校に忍び込んでいたのだということ思い出し、あわてて階段の方へ足を踏み出す。

「……優花？」

ずつと聞きたかった声が耳に飛び込んできたのは、そのときだった。

20・空色とマリンプール

「啓太……」

茫然と立ち尽くす優花に、啓太がほつとした表情で駆けよってくる。

「やっぱり優花だ。どうしたの？ こんなところで」

「啓太が学校に残ってるって、友達が教えてくれて……それで」

「ああ、四階の階段のところにいたんだよ。教室、みんな出て行った鍵かけられちゃうから」

啓太が上り階段を目で示しながら言う。それから、すこし困ったように笑ってつぶやいた。

「えっと、会いに来てくれたってことだよね」

優花はこくりとうなずいた。

言葉がのどの奥でつかえて、声にならなかった。ただ、目の前にいるのがほんとうに啓太なのだとか確かめるように、その顔を見ていた。

「よかった。そろそろ下校時間だから、ぎりぎりだった。もうここは出なきゃいけないし……公園行く？」

もう一度うなずいたとき、啓太はふと優花の足もとに視線をやり、苦笑した。

「それ、寒くない？ 適当に誰かの上履き使っちゃえばよかったのに」

「うん……けっこう、寒い。ってというか痛い」

優花も笑ってそう答えた。やっと以前と同じように、笑えた気がした。

ふたり並んで階段を下り、校舎の外に出る。まだグラウンドで遊んでいる児童に目をやっていると、啓太が「校庭使えるの、五時までなんだよ」と説明してくれた。

校門を抜けて、傾き始めた日に照らされた通りを歩く。目に映る範囲に人影はない。寒さに肩をすぼめながら、優花はそつと隣をうかがった。啓太はジャケットのポケットに手をつ込み、うつむきがちに歩いている。

「啓太」

優花は思い切って、声をかけた。

「なに？」

ずつと心の深い所にのしかかっていた想いを、言葉にする。

「前……約束破って、ごめんね」

「約束？」

「公園で会おうって言ったのに」

「ああ、いいよ。優花、最近時間なさそうだったし」

啓太はそこで声を切り、それからぼつりと言った。

「……ほんとと言うと、ひいたかなって思ってた」

「え？　なんで？」

優花が問うと、啓太はばつが悪そうに視線を落とし、

「僕、最後に会ったとき、泣いてたじゃん。泣いてたっていうか、泣いてたのに気づかれたっていうか……それで、ひいたかなって」

そう言うって、自嘲めいた笑みをつくった。優花は大きくかぶりを振った。思わず声を上げていた。

「違うっ……そんなんじゃないよ」

「だったら、よかった」

啓太は心底安心したように頬をゆるめた。優花はなにも言えなくなつて、啓太から視線をそらしうつむいた。夕暮れの日差しがつきり出す長い影がふたり分、アスファルトの上に長く伸びていた。

分かれ道に差しかけたとき、唐突に啓太が言った。

「ごめん、先に公園行っててくれる？　ちょっと取りに行きたいものがあつて。道、分かる？」

優花がうなずくのを確認すると、なるべく早く戻るから、と言いつつ残して啓太は走っていった。優花はその背中を見送ると、再び歩き

始めた。道をひとつ折れ、間もなく公園に行き着く。すこしためらった末にいつものベンチに座り、啓太が来るのを待った。

日はほとんど地平線に沈み、園内は静寂に満たされている。凍えた手をこすり合わせていると、ややあつて啓太が戻ってきた。手には大きめの手提げ鞆を持っている。優花のもとまで来ると、鞆をベンチの上に置いて自分もその隣に腰かけた。

「あー、疲れた」

白い息をはずませながら、そう言って笑う。

「なにが入ってるの？」

啓太は答えがわりに一冊のノートを鞆から取り出し、優花に差し出した。

「これ、返さなきゃってずっと気になってたんだよね」

たくさんの物語が書かれたノート。

優花がそれを受け取ると、啓太はつづけて鞆からスケッチブックを取り出した。ゆっくりとそのページをめくり、すぐに手を止める。それから空を見上げ、「ここじゃ見えにくいかな」とひとりごちて立ち上がった。近くにある外灯の下まで行くと、優花を手招きする。それに従って、優花も外灯の下へ足を向けた。啓太が持っているスケッチブックをのぞき込む。

それは、優花が以前考えた物語を描いた絵だった。

空色とマリンブルーが溶け合い、鳥も魚も、同じひとつの空間を生きている。

すべてを受け入れてくれる、境界のない世界。

ふいに熱いものが込み上げてきて、視界がぼやけた。涙がぼろぼろと頬を伝う。

「なんで、いきなり泣くわけ？」

啓太があわててたずねる。その問いに答えることもできず、優花はただ泣きつづけた。

気づいてしまった。

陽子から啓太の話を聞いたとき、そんな変な子と遊んでいる自分

が恥ずかしいと思ってしまったこと。

境界がない世界を求めながら、自分も他のみんなと同じように境界をつくっていたこと。

啓太はあーあ、と声を洩らした。

「今度は優花が泣いた」

優花はごしごしと目元をこすり、顔を上げた。

啓太は笑っていた。優花もつられてはにかんで、それから冗談めかして言った。

「嬉しくて、泣いた」

「なにそれ。絵なんて、いつも描いてやってるじゃん」

呆れたように言う啓太に、優花はそうだけど、とつぶやく。それから、はたと気がついてたずねた。いまを逃したらもう聞くことができないと思った。

「……啓太はあのと看、なんで泣いてたの？」

21・スケッチブック

とまどいを感じさせる間のあと、啓太は居心地悪そうに視線をそらし、投げやりな口調で言った。

「言わなかったっけ？ 親とけんかしただけ」

「それは聞いたけど……なんでけんかしたの？ ってこと」

さらに追及してみるが、啓太は「べつに、どうでもいいようなことだし」と話を受け流そうとする。

「ん……でも、どうでもいいことでも、聞くよ」

重ねてそう言うと、優花がここまで食い下がると思っていないかったのだろう、啓太は意外そうに優花の目を見た。それから、観念したとでもいうふうに苦笑する。ほんとにどうでもいい理由だよ、と再度前置きをして話を切り出した。

「僕の父さんが 僕が二年の時だったかな、家を出て行ったんだ」
具体的な時期までは知らなかったが、それは陽子からすでに聞いていた話だった。けれど本人の口から聞かされると、あの話は事実だったのだという実感が込み上げてきた。優花がなんとかうなずくと、啓太はそれに促されるように言葉を継ぐ。

「まあでも、僕にとっては優しい父親だったし、嫌いじゃないんだよ。けど、あいつ……母親がさ。さんざん父さんのこと悪く言っただけが捨てられたんだとか言ってきた。あんまりむかついたから、お前の男癖が悪いから父さんが愛想尽かしたんだろって言ったら、いきなりキレ出して」

吐き捨てるように一気にしゃべると、啓太はすこし気が晴れたのか、今度は落ち着いていた声色で言い足した。

「僕、父さんが出て行ったあとこっちに引っ越してきたんだけど、それだつて母さんが男を追いかけてきたんだよ。父さんがいた頃から付き合ってたやつ」

それから、思い出したようにたずねてくる。

「石川って知ってるだろ？ 石川陽子」

優花がうなずくのを認めると、啓太はすっと視線を落とした。

「あいつも……他のやつらも、僕の父さんと母さんについて、適当なことばっか話してる。ほんと勝手だよ」

自分の周囲にいる人間すべてを憎悪しているかのように、啓太が地面をにらんで声を絞り出す。その冷たい口調から抑えきれない感情が溢れているようで、優花は啓太を直視できなかつた。これまで一緒にいて初めて、啓太が怖いと思った。

「……啓太、ごめん」

気の利いた言葉が思い浮かばない中、ぼつりと洩れたのは謝罪の言葉だつた。陽子たちに何も言えなかつたこと、そして啓太の気持ちをつかっていたいながつたことに対しての。

「なんで優花が謝るんだよ」

啓太は動揺した様子でそう言うと、きびすを返してベンチの方へ足向け、そこに座つた。優花もその隣に腰を下ろす。

取り繕うような笑みを浮かべ、啓太が言った。

「そう言えば僕、いつも色鉛筆使ってるだろ？ あれ買ってくれたの、父さんなんだ」

「いつ買ってもらつたの？」

優花が聞くと、啓太は記憶を手繰り寄せるようにこめかみに手を当てた。

「うーん……いつだったかな。幼稚園のころなのは、確かだけど」

「すごいよね。あんないっぱい種類があるの、幼稚園のときに買ってくれるって」

優花が幼稚園に通っていたところに与えられた色鉛筆セットと言えば、十二色しかない簡素なものだつた。だから、幼いころからあれほど種類の豊富なものを使っていたというのは、純粹にすごいと思つた。

「だよ。おかげで、昔から絵ばっかり描いてたし」

それから、しばらく静寂が落ちた。

吹きつける風で指先や耳が痛く、胸が苦しい。空を見上げると、藍色に丸くくりぬいたような月が浮かび、その周辺を星が飾っていた。

優花は寒いのが苦手だった。けれど、空が透明感を増すことに気づいてから、冬は嫌いな季節ではなくなった。

「ここで種明かし」

沈黙を破り、啓太が冗談めいた口振りで言う。

「なんの？」

「優花、僕が絵にひとの形した影を描いたとき、誰かって気にしてただろ。父さんで正解だよ」

ああ、と優花は合点した。確かに何度か、そんな会話を交わしたことがある。

「それ、わたしが一番最初に言った答えじゃなかった？」

ふと思いついて聞くと、啓太は苦笑交じりにひとりごちた。

「どうでもいいこと、覚えてるなあ」

「っていうか、どうでもいいことしか覚えてないかも」

顔を見合わせてすこし笑い合う。

そのあと啓太はうつむき、長いため息をついた。靄が空気を束の間だけ白く染め上げ、あたりに溶け込むように消えていった。それを見届け、啓太はゆっくりと言葉をつむいでゆく。

「父さんに行ったことある場所に行ったとき、わりと思いつくんだよね。あー、ここ来たことあったな、って。……まあ、思い出せて嬉しいとかって全然ないんだけど」

「お父さんのこと、嫌いじゃないの？」

不思議に思っただけで聞くと、啓太は口をつぐみ、やがて胸元を手で示しながら苦々しげに言った。

「嫌いじゃないけど……これからどうせ会うこともないのに、昔一緒に遊んだことか思い出すと、なんかこのへんが気持ち悪いっていうか。なんで出て行ったかな、ってやっぱりいらいらしてくるし」

家に帰れば父にも母にも会える優花には、いまひとつ啓太が伝えようとしていることが分からなかった。だから気の利いた言葉なんて思い浮かばなくて、口をついて出たのは「また、いつか会えるよ」という根拠のない励ましだけだった。

「んー……そうかな」

啓太ははにかんだ、けれどどこか淋しげな面持ちでそう応えただけだった。これ以上話題を引きずる気はないらしい。手に持っているスケッチブックを一瞥したかと思うと、それを優花に差し出してきた。

「これ、優花にやるよ」

「いいの？」

「うん。さっき見せた絵は自信作だから、大事にしてくれると嬉しいかな」

絵はいつも見せてもらっていたけれど、スケッチブックをもらうのは初めてだった。優花は宝物を受け取るように両手を差し出し、「うん、大事にする。……ありがとう」

啓太は照れくさそうに優花から顔をそむけ、そして空を仰いで言った。

「そろそろ帰ったほうがよくない？」

「あ……そうかも。前遅くなったとき、すごい怒られたし」

優花はあわててベンチから腰を上げ、啓太の方を向き直った。

「啓太、また来る？」

「来週の木曜。優花が僕から逃げてるわけじゃないって、分かったしね」

いたずらっぽく言う啓太に、優花は思わず苦笑いして肩をすくめた。

「じゃあ、またね」

「うん。じゃあね」

手を振ってきびすを返し、公園をあとにする。出入り口を抜けたところでうしろを振り返ると、やはり啓太はベンチに座っていた。

もしかして、お母さんに会いたくないから、家に帰りたくないのかな。

ふいに頭をよぎった考えだったが、的を射ているように思えた。冷たい空気のせいだけでなく、優花はすこし胸が苦しくなった。

啓太がくれたスケッチブックを小脇に抱え、暗い夜道を進んでゆく。家に着いたら部屋で啓太の絵を見よう、そう思った。

22・やさしい物語をつむいで

家に着くと、予想通りと言っべきか母の小言が待っていた。女の子が夜に外を出歩くのは危ない、せめて行き先くらいは告げていけと。

優花はそれが終わるやいなや、急いで玄関へ向かった。靴箱の上に置いておいたスケッチブックを手に取ると、自室に入って鍵をかける。

さいわい兄は今日塾があり、帰りが遅い。

優花は学習机につくと、胸のはやりを抑えながらスケッチブックをひらいた。

青空を背負った校庭。

羽休めをしているはずめ。

燃えるように赤々とした紅葉。

冬枯れした街路樹のケヤキ。

さまざまな風景が、色鮮やかに視界に飛び込んでくる。優花は一枚いちまい、終わりが来るのを惜しみながらゆっくりとページをめくっていった。

半分をすこし過ぎたあたりで、空色とマリンプルールの溶け合った絵が目映った。境界のない世界を、啓太が描いてくれたもの。その次のページには何も描かれていなかった。

全部使い切っていないのに、わたしにくれてよかったのかな……いぶかしく思いながらページをめくってゆぐが、やはり白紙ばかりがつづいている。

と、最後から三枚目のページに行きついたとき、変化がおとずれた。ページいっぱい、細かく走り書きのような文字が書かれている。優花の目は自然とその文字をたどり始めた。

優花がここを見るかわからないけど、直接言いたくないのでここに書いておきます。

ぼくは春から母さんの実家に行くことになりました。

くわしいことはわからないけど、ちょっと前から話が進んでたみたいです。

実家は九州にあるから、そうなたらもう優花と会うことはなくなると思います。

啓太からの思いがけない手紙に、優花はしばらく内容が理解できなかつた。

内容が理解できると、今度は指先が震えてきた。

息を吸い込んで自分を奮い立たせ、その先の文字へと視線をすべらせる。

優花には話してなかつたけど、ぼくの父さんは数年前に事故で死にました。

その前から家を出て行ってどこにいるのかわからなくて、

いきなり知らない町で死んだとか聞かされても、どうすればいいかわからなかつたんだけど。

父さんのことはたまに思い出してしんどくなることがあります。

べつに父さんのことがきらいってわけじゃないんだけど、

たぶんもう会えないってことがわかってるからだと思う。

会えないってわかってるのに、父さんといっしょに行った場所とかに行くと思いついて

むなしくなるってどうか。

だから、優花に会うのも今日で最後にしようと思います。
どうせぼくは九州に行くってわかってるのに、そのときまで会
うっていうのもびみょうだし。

いきなりこんなこと言ってほんとにごめん。

* *

二ページにわたる文章を読み終えるのに、どれほどの時間がかか
っただろうか。束の間のようにも、とても長い時間のようにも優花
には思えた。

頭が混乱してしまっただけで考えがまとまらない。なぜかひどく息が詰
まっただけで、心がうずいた。

父親が家を出て行ったという事は、昨日聞いた。けれど、その
あと事故で死んでしまった。それは、初耳だった。

すこし気持ちが落ち着くと、啓太と過ごしたときのこと、次々と
頭に浮かんできた。

出会った日のこと。

初めて優花の物語を描き出してくれた日のこと。

そして、ふたりで土手に行った日のこと。

土手に行った帰り道、これからは公園以外の場所にも行きたいと
優花が言ったとき、啓太ははっきりとそれを拒んだ。今日は特別
と。

それに、優花は自分のことをたくさん話したけれど、啓太が自分
のことを話してくれたことはほとんどなかった。

あんまり仲良くなつて、いろんな場所に行ったりしたら、そ
のぶんお別れしたあとに悲しいから。

啓太と自分を隔てている、ガラスの壁とは違うなにか。

優花はようやく、それが分かった気がした。

父がある日突然姿を消したように、優花が自分の前からいなくなる日が来ることを考えて、啓太はずっと隔たりをつくっていたのだと。

優花は机に両肘をつき、目頭を押さえた。心の中で啓太に悪態をつく。

どっちにしたって、悲しいことに変わりないじゃん。

どうせそうなのだから、啓太にはもつと自分のことを話してほしかったし、ふたりでいろんなところに行きたかった。けれど、啓太はもう公園には来ないだろうし、昨日のように学校に残っていることもないだろう。優花にはそれがよく分かっていた。

なんで、黙ってることばかりなの。また来るって言ったくせに、うそつき。

悲しさとも悔しさともつかない感情が胸をふさぐ。

優花はもう一度、スケッチブックに視線を落とした。淡く繊細な絵からは想像のできない、乱雑な字。削れた鉛筆の芯で紙も黒ずんでいる。絵はこんなにきれいなものにな、と前の方のページを見返して、優花は思わず笑ってしまった。自分の字は汚いと話す、啓太の苦笑した顔が脳裏をかすめた。

それから、思い切って最後のページをひらく。

何も書かれていないかもしれない、という予想に反して、そこには荒い筆跡で言葉がつづられていた。

あと、最後に。

うそっぽい話って言われたって優花は前言ってたけど、

ぼくは優花の書く話が好きだった。

毎日いやなことばかりだったけど、優花の話を読んだときは
そういうことわすれられたし、絵を描いても楽しかった。

だからこれからも、やさしい話をたくさん書いてほしいと思います。

じゃあ、手紙でこんなこと言うのはずかしいけど、いままでもありがと。

2.2 やさしい物語をつむいで（後書き）

当初の予定とは違う方向に話が転がって迷走したりもしましたが、なんとか完結させることができてよかったです。主人公の年齢をもうちよつと上げてよかったかなと思わないでもないのですが…。

それでは、粗の多い話ではありますが、最後までお付き合いくださった方、どうもありがとうございます。

もし感想や誤字脱字（これがかなり心配…）がありましたら、教えてくださいと嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679o/>

やさしい物語をつむいで

2011年1月16日01時46分発行